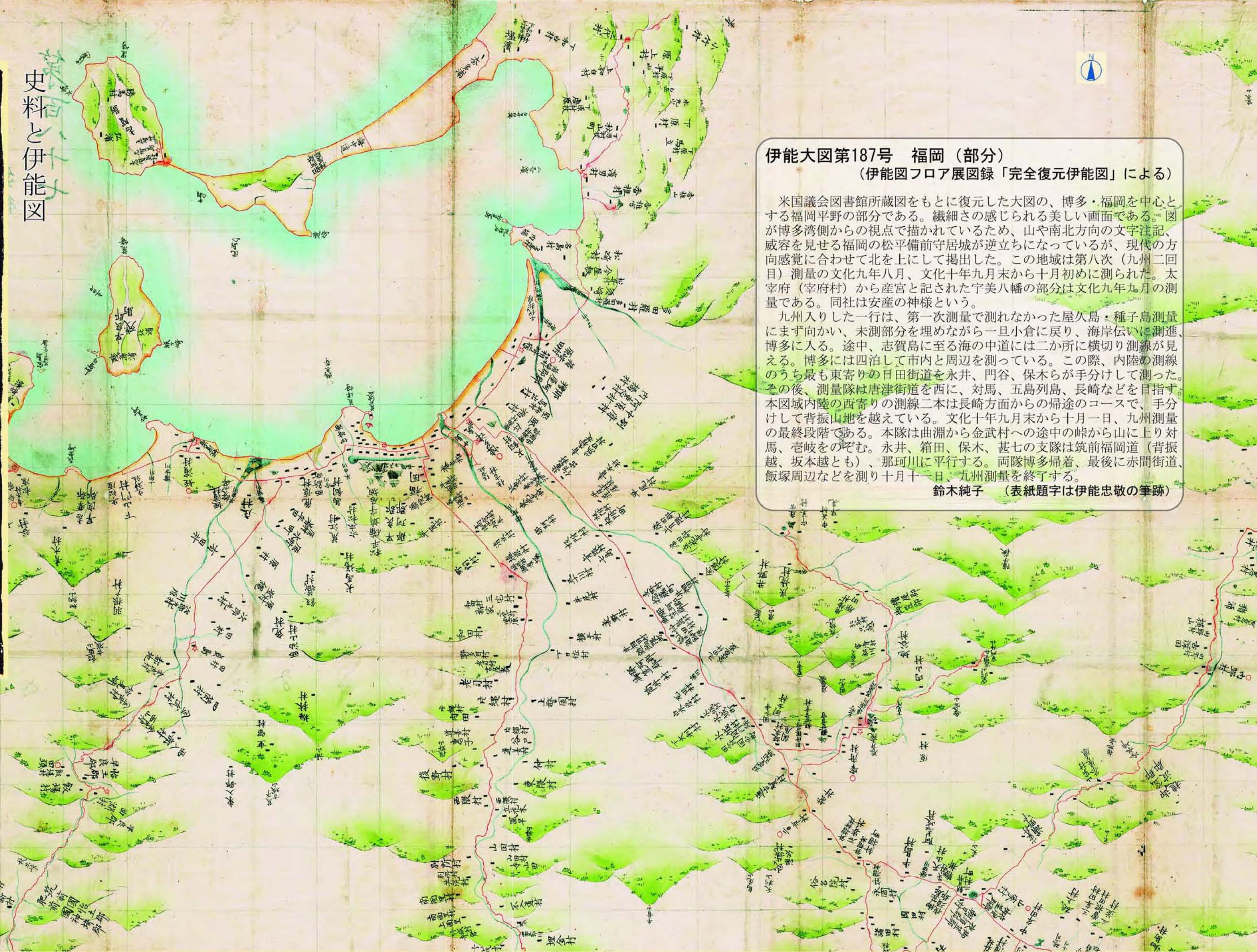


伊能忠敬

研究

史料と伊能図



伊能大図第187号 福岡（部分）
（伊能図フロア展図録「完全復元伊能図」による）

米国議会図書館所蔵図をもとに復元した大図の、博多・福岡を中心とする福岡平野の部分である。繊細さの感じられる美しい画面である。図が博多湾側からの視点で描かれているため、山や南北方向の文字注記、威容を見せる福岡の松平備前守居城が逆立ちになっているが、現代の方向感覚に合わせて北を上にして掲出した。この地域は第八次（九州二回目）測量の文化九年八月、文化十年九月末から十月初めに測られた。太宰府（宰府村）から産宮と記された宇美八幡の部分は文化九年九月の測量である。同社は安産の神様という。

九州入りした一行は、第一次測量で測れなかった屋久島・種子島測量にまず向かい、未測部分を埋めながら一旦小倉に戻り、海岸伝いに測進、博多に入る。途中、志賀島に至る海の中道には二か所に横切り測線が見える。博多には四泊して市内と周辺を測っている。この際、内陸の測線のうち最も東寄りの日田街道を永井、門谷、保木らが手分けして測った。その後、測量隊は唐津街道を西に、対馬、五島列島、長崎などを目指す。本図域内陸の西寄りの測線二本は長崎方面からの帰途のコースで、手分けして背振山地を越えている。文化十年九月末から十月一日、九州測量の最終段階である。本隊は曲淵から金武村への途中の峠から山に上り対馬、壱岐をのぞむ。永井、箱田、保木、甚七の支隊は筑前福岡道（背振越、坂本越とも）、那珂川に平行する。両隊博多帰着、最後に赤間街道、飯塚周辺などを測り十月十一日、九州測量を終了する。

鈴木純子（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）

二〇一一年 第六三号

三国峠を越えた伊能忠敬

星 埜 由 尚

蔵、国立国会図書館蔵、伊能大図第79号の
を、坂権現の測量
三、坂権現の測量
あり、坂権現の測量
折れ線、坂権現の測量
峠を越え、坂権現の測量
量が、坂権現の測量
量、坂権現の測量
う、坂権現の測量
地点、坂権現の測量
登、坂権現の測量
い、坂権現の測量
た、坂権現の測量



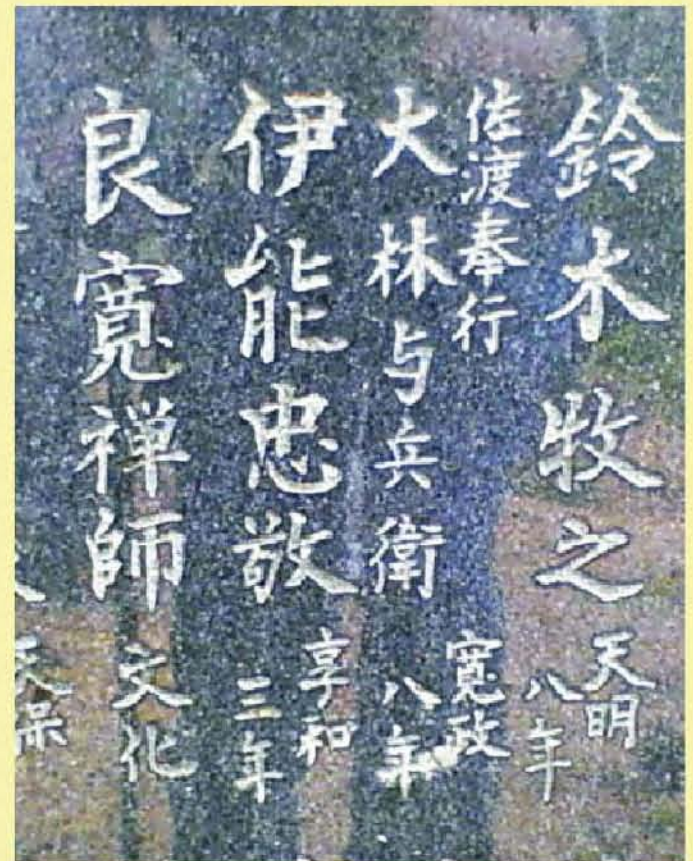
二万五千分の1地形図
「三国峠」の一部



伊能大図第79号 国立国会図書館蔵



三国峠を越えた人々の碑



伊能忠敬の部分拡大

三国峠は、標高約一三〇〇メートル、太平洋と日本
海の分水嶺をなし、古来関東と越後を結ぶ要衝
の地であり、多くの人々が往来し、難所でも
あった。現在は、直下に国道一七号線がトンネ
ルを穿って通っており、自動車で容易に通過す
ることができるようになった。
今夏、三国山に登る機会を得て、小雨模様の中、
群馬県側から三国峠を経て三国山の山頂を
目指した。三国峠直下の三国トンネル入り口
(約一〇〇メートル)から登山道があり、小一時間
で三国峠には、神社があり、休憩所と避難小屋と
三国峠を越えた歴史上の人物を列記した碑があ
る。伊能忠敬が、第四、五次測量の際、三国峠
を越え、坂権現の社があり、十三、四丁先
に別当の居宅があり、測量日記には、三坂権現
が訪ねたときと同じような景色だったのではな
いだろうか。

目次 63号

グラビア

●伊能図の旅

大図三二号より 箱館
大図一〇〇号より 富士五山
大図一三三号より 京都伏見

解説・星埜由尚

1

話題

●特報 大谷亮吉旧蔵

「伊豆七島特別中図」競売

渡辺 一郎

6

●伊能測量現地史料紹介④

尾鷲大庄屋土井家文書(二) 全文紹介

忠敬が知らないとこで、心得触れが発行される

伊藤 栄子・渡辺 一郎

11

コラム「伊豆七島中図などの入札結果について」

16

●伊能測量現地史料紹介⑤

第四次隊、中能登を行く(二)

真館「覚書」より

河崎 倫代

17

●忠敬に信頼された測量先の協力者たち

福岡の国学者・青柳種信のこと

渡辺 一郎

23

●富士山の方位に拘った銚子測量の検証

宮内 敏

28

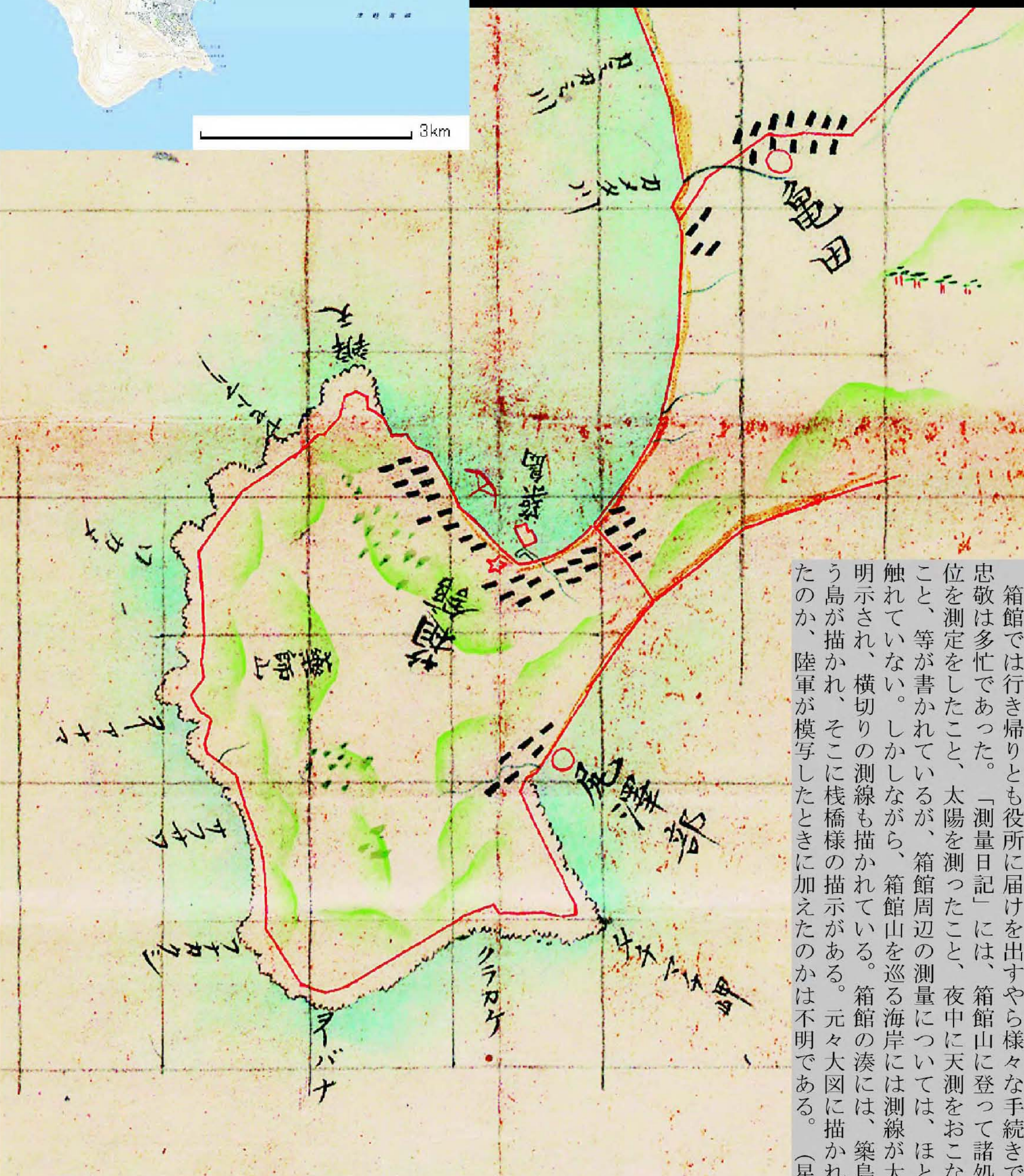
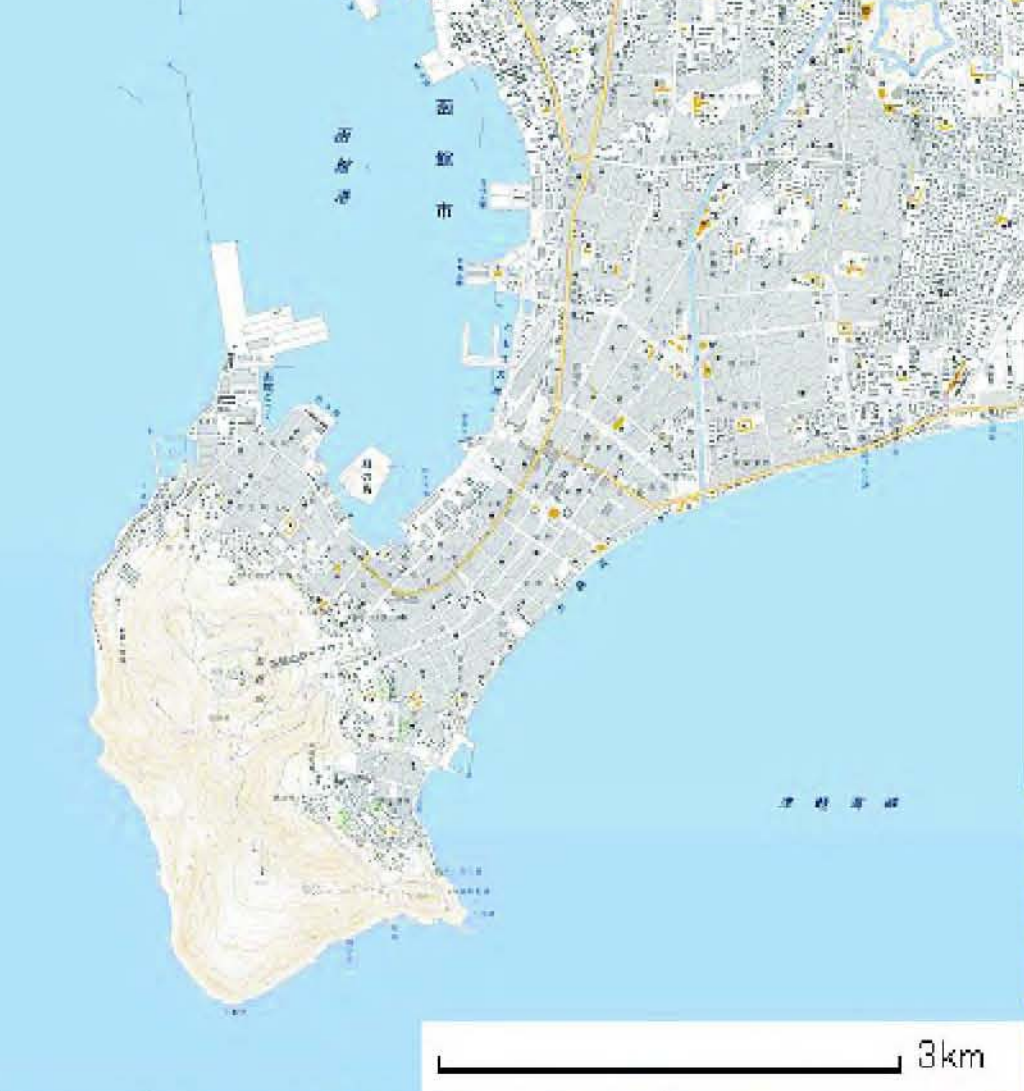
ニュース・お知らせ

各地のニュース・新聞から・会員便り・新入会員紹介・各地を巡って
ホットニュース・会報著作権譲渡のお願い・投稿要領 ほか
伊能忠敬ゆかりの地めぐり 星埜由尚 表紙解説 鈴木淳子

編集部

36

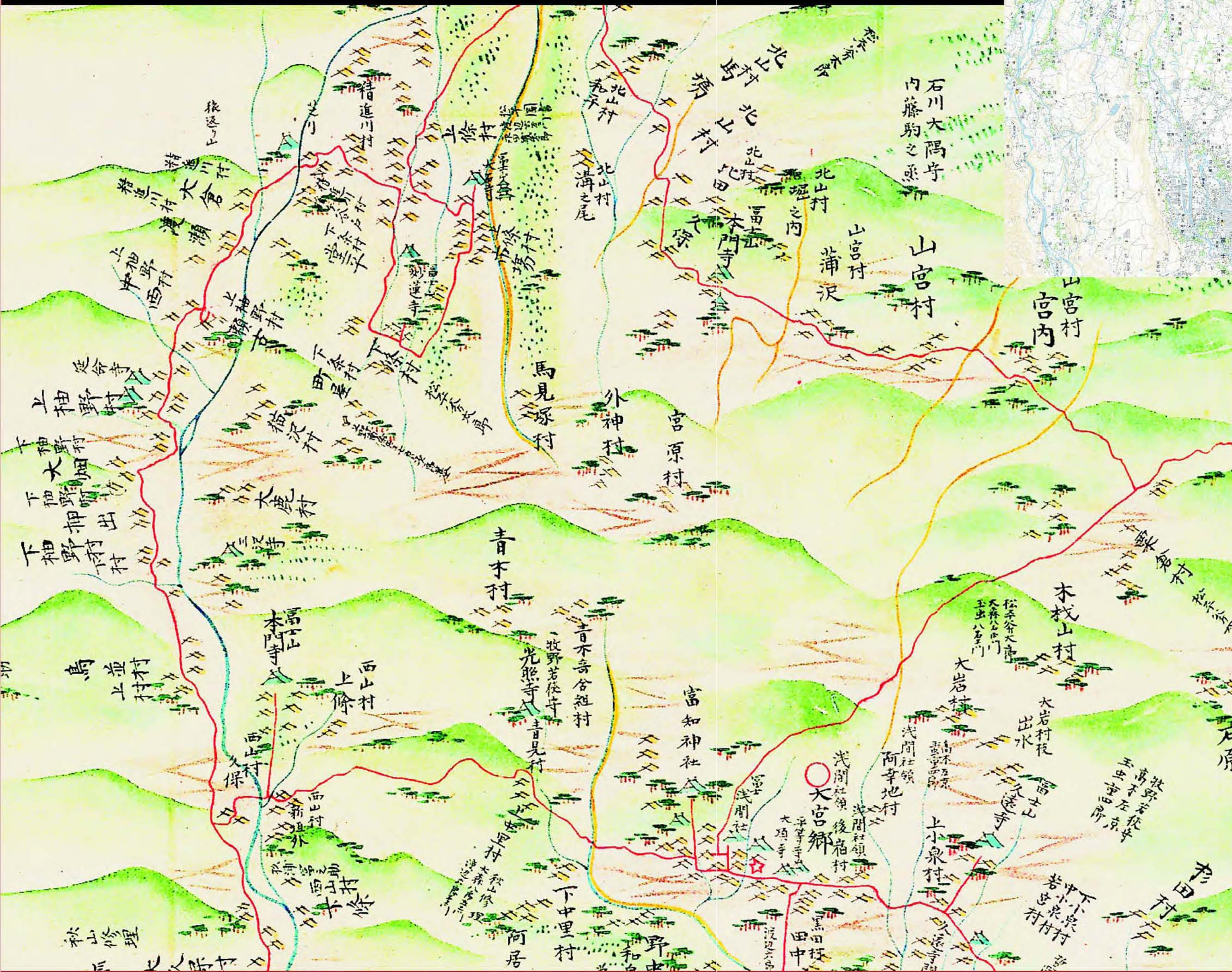
伊能図の旅



大図三二号より

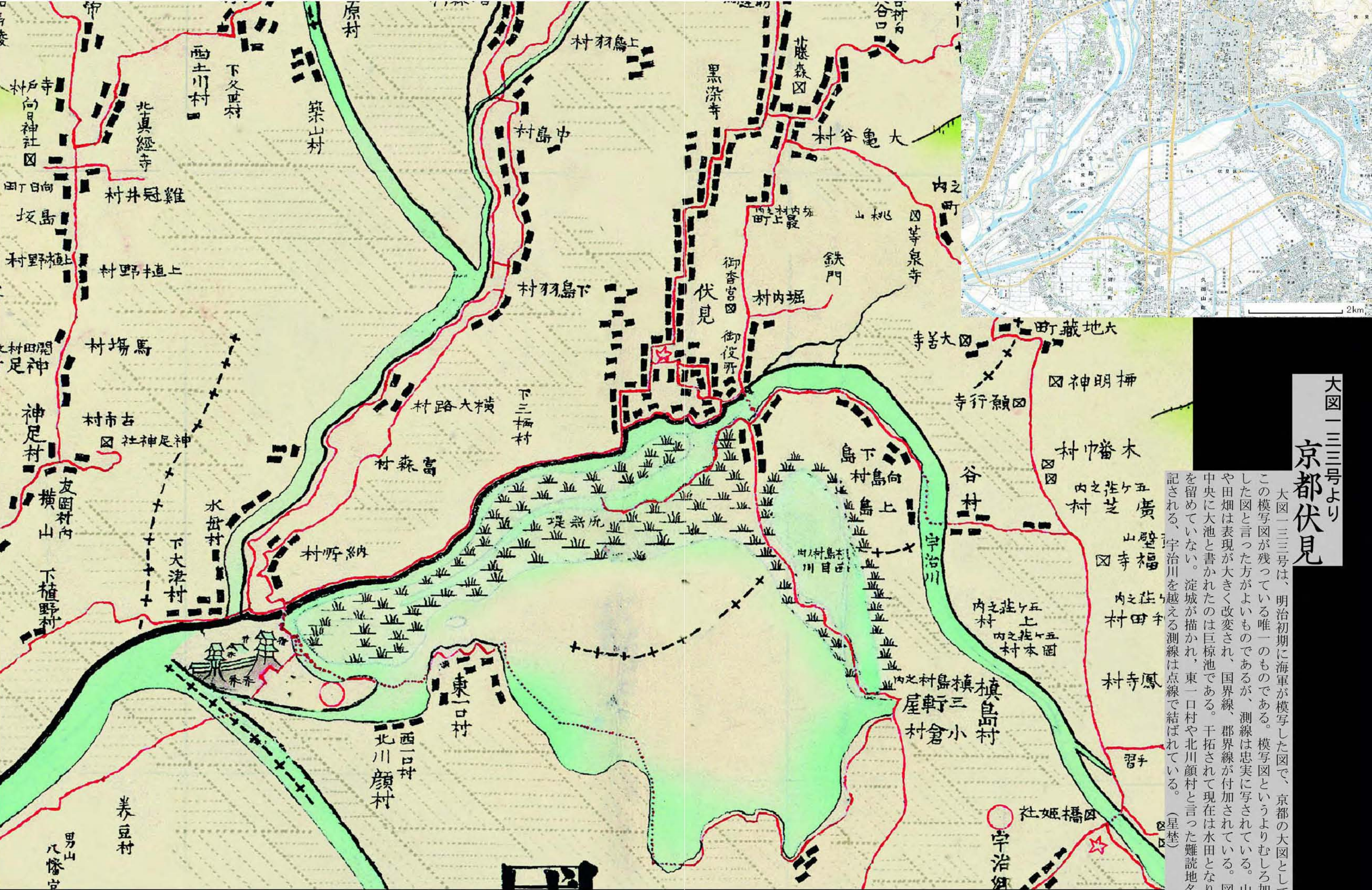
箱館

箱館では行き帰りとも役所に届けを出すやら様々な手続きで伊能忠敬は多忙であった。「測量日記」には、箱館山に登って諸処の方位を測定をしたこと、太陽を測ったこと、夜中に天測をおこなったこと、等が書かれているが、箱館周辺の測量については、ほとんど触れていない。しかしながら、箱館山を巡る海岸には測線が大図に明示され、横切りの測線も描かれている。箱館の湊には、築島という島が描かれ、そこに栈橋様の描示がある。元々大図に描かれていたのか、陸軍が模写したときに加えたのかは不明である。(星埜)



富士五山

富士山の南麓の測量には、忠敬は参加しなかったが、第3次測量で詳しく測られている。伊豆七島の測量を大変な苦勞の末に終えたのち、わざわざ富士山の裾野をめぐり測量した。その理由はいくつかあるが、富士五山や富士浅間神社の位置を明らかにする目的があったのかもしれない。富士五山は、上条大石寺、北山本門寺、西山本門寺、小泉久遠寺、下条妙蓮寺の5寺で日蓮宗の古刹である。これらの寺は大図に全て明記され「測量日記」にも記載がある。（星埜）



大図一三三号より
京都伏見

大図一三三号は、明治初期に海軍が模写した図で、京都の大図としてはこの模写図が残っている唯一のものである。模写図というよりむしろ加工した図と言った方がよいものであるが、測線は忠実に写されている。山景や田畑は表現が大きく改変され、国界線、郡界線が付加されている。図の中央に大池と書かれたのは巨椋池である。干拓されて現在は水田となり跡を留めていない。淀城が描かれ、東一口村や北川顔村と言った難読地名が記される、宇治川を越える測線は点線で結ばれている。(星楚)

特報

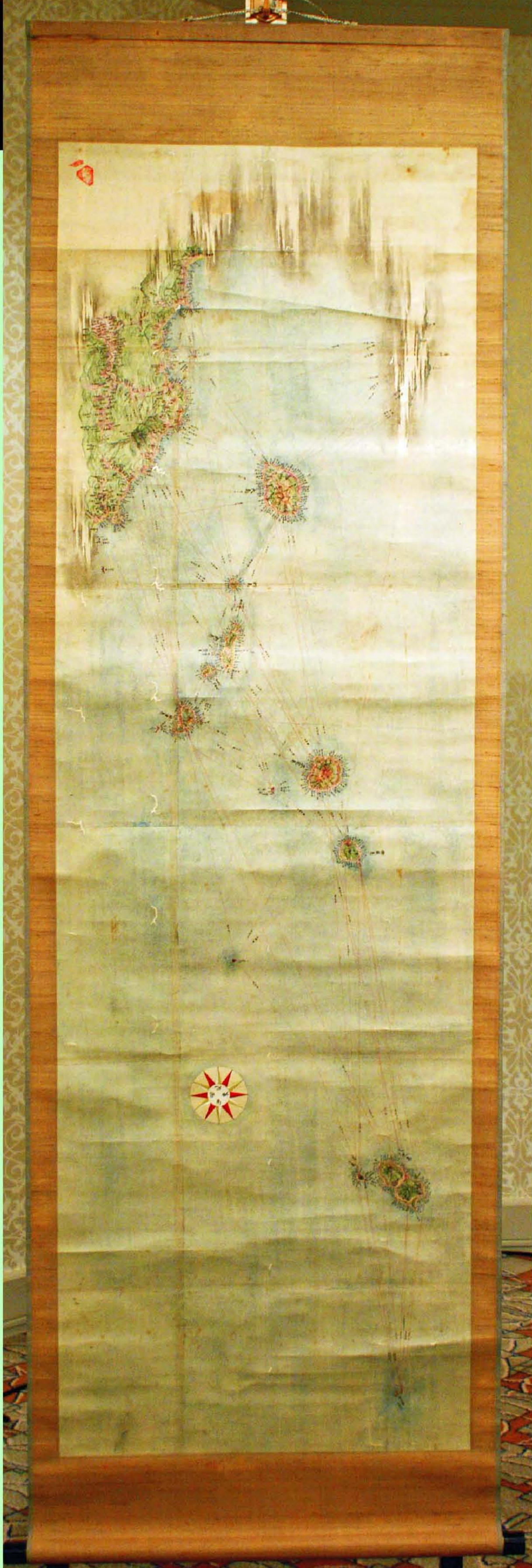
大谷亮吉旧蔵 「伊豆七島特別中図」競売

渡辺 一郎

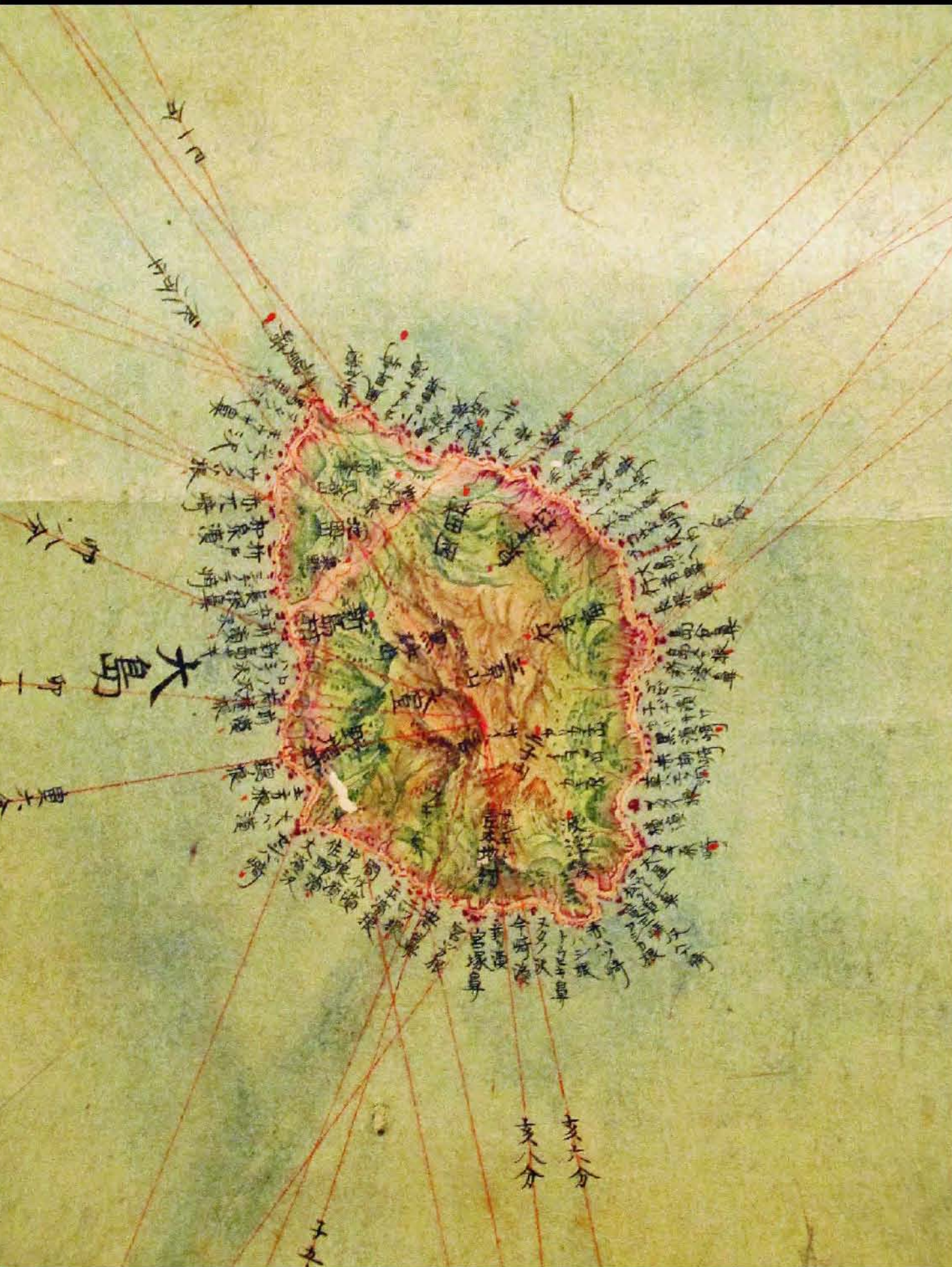
一九九五年に伊能忠敬研究会を設立し、国内外に散逸する伊能図を探し始めてから約一六年を経過しました。この間、多数の関係者の御協力で、現在では大図二一四枚、中図八枚、小図三枚の全容がほぼ明らかとなっております。

ところが、本年十一月、珍しいことに東京古典会の百周年記念入札会で、忠敬研究の世界では有名な大著『伊能忠敬（大正六年刊、七六六頁）』の著者大谷亮吉氏旧蔵の伊能中図「伊豆七島図」が競売になりました。

伊能忠敬研究会の創立以来、正統な伊能図の競売をみるのは始めてであります。ぜひ適切な評価がなされ、然るべき場所に収蔵されることを期待しています。



大谷亮吉旧蔵『伊能忠敬先生 伊豆七島図』（右）とその箱書き（中・左）



大谷亮吉旧蔵中図（伊豆大島の部分）

については僭越ですが、取扱者の手元にある間に、私共のこれまでの調査経緯を踏まえて、本図に関する意見をまとめてみました。御参考になれば幸いです。

追記参考資料に添付しましたが、これまでに知られていながら、所在が確認できない行方不明の伊能図は沢山あります。これらが世の中に出てくる一助ともなるなら大変幸せだと思っています。

一、外觀、形状、箱書

外觀は桐箱入り。軸装 地図サイズ 150.0×

47.4cm 箱の蓋裏に大谷亮吉直筆の箱書がある。箱書きの文言は追記①のとおりである。

大正二年秋、東京古書籍展覧会で発見し購入、装丁を加えて珍藏したという。装丁者は大谷である。記述の最後に、昭和四年六月、於大阪高等学校 天覧ノ栄ヲ賜ウ、とある。

大谷は東大理学部の手として、長岡半太郎博士監修の下で『伊能忠敬』を完成後、旧制大阪高等学校の教授、京都大学教授を務めたから、大阪高等学校時代に、学校に天臨があつて、昭和天皇に本図をお見せしたものである。天覧を記念して箱書を記したので

あろう。

二、大谷亮吉『伊能忠敬』における記述

大谷は自著『伊能忠敬』の六〇七頁に本図に関する所見を述べているので、追記②に紹介する。

三、地図の内容

描画範囲は第九次測量の伊豆七島および伊豆半島東岸の一部。

地図分類としては、大谷のいうように第九次測量地域の中図である。

描画内容は精細で、最終版中図（旧ペイレ中図と比較）よりも、最終版大図（アメリカ大図と比較）よりも、地名の記載が多い。文字は毛利文庫の伊能図とよく似ている。経緯線はないが、方位線は多い。

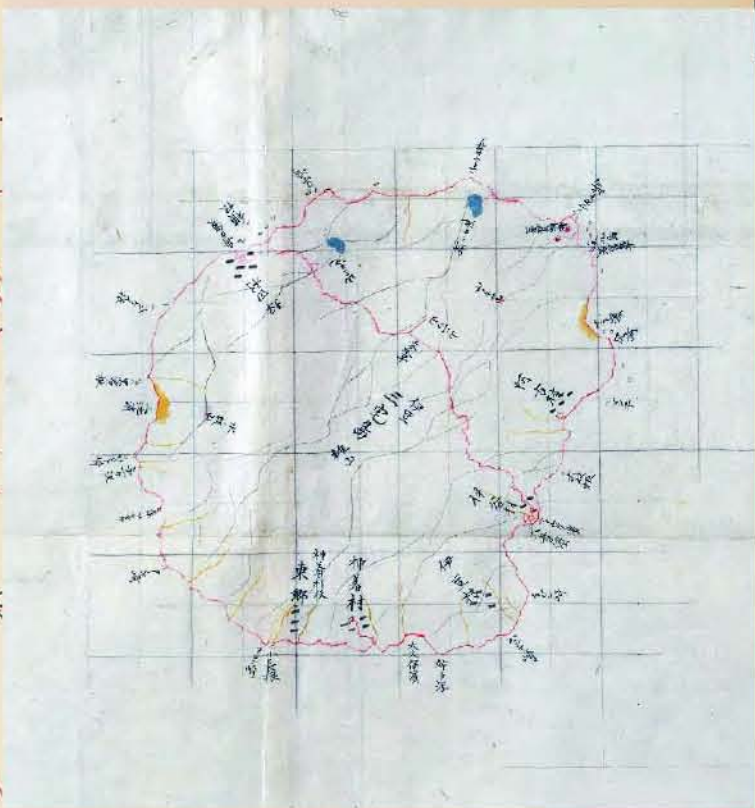
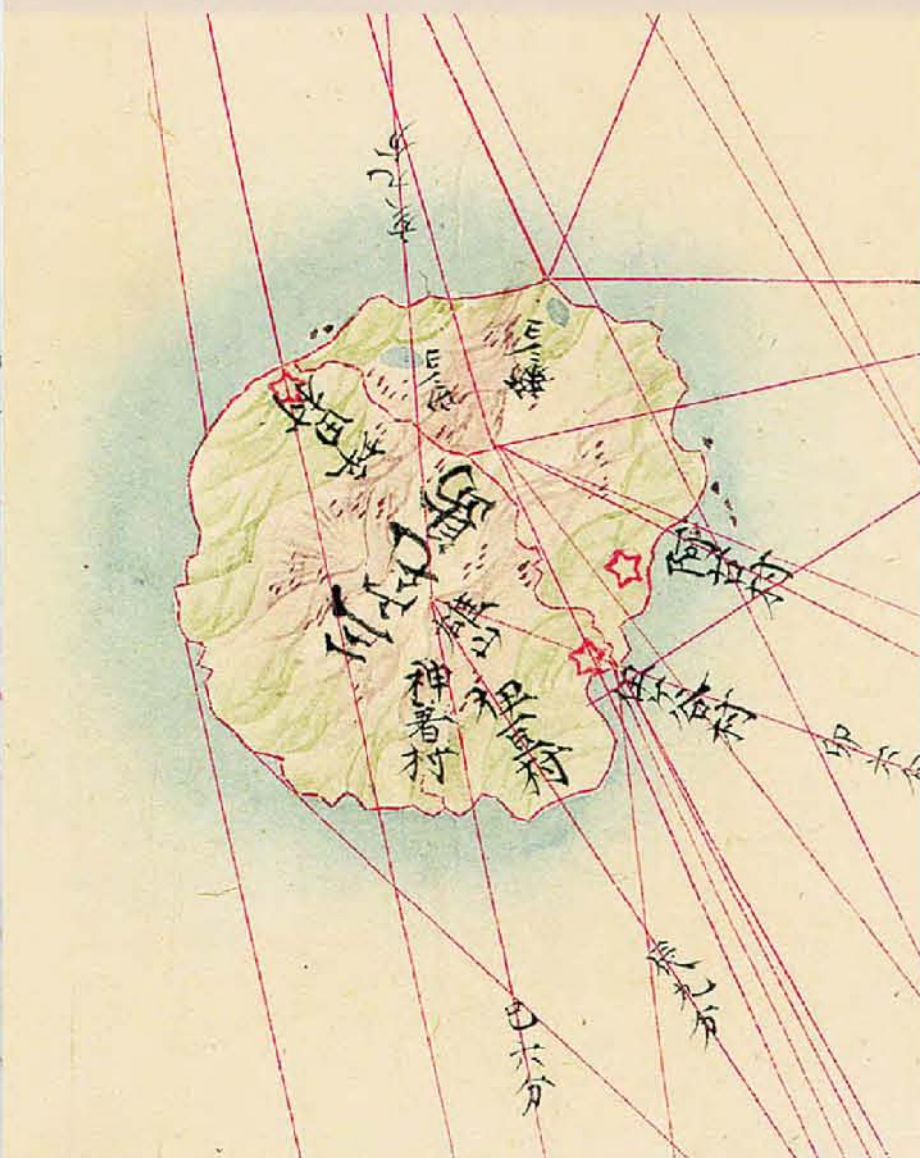
四、針穴の有無

装丁の際、裏打ちのため埋まっているが、針突法で使われた針穴の痕跡が残っている。したがって、伊能測量隊のメンバーの手で制作されたことは確実である。

五、第九次測量諸図の現況と測量環境

特別大図 伊豆七島の一萬二千分の1の華麗な大図が伊能忠敬記念館に現存し国宝指定されている。

大図 大谷が伊豆半島の複製図一枚伊能家



大谷中図（左）とペイレ中図（中）、およびアメリカ大図（右）

にあり、と記している「下田附近から小田原までの第九次測量の地域の大図」一枚は伊能忠敬記念館に伝存し、国宝指定されている。

本図は、副本と位置付けられる。大谷が著述した時期には、最終版大図副本が存在した筈であるが、著書では、それに触れていない。

中図 大谷説では、第九次測量地域の中図があつて、その複製図が本図であるというが、伊能忠敬記念館には原図は伝存していない。

針穴本でない写し（写本）が金沢文庫と長崎市立博物館に所蔵されている。金沢文庫本は来歴不詳だが、長崎市立博物館本は渋川助左衛門（高橋至時の弟善助が渋川家を継いだ）所持の図を、大村藩士・峰源助が写したことが分かっていいるから、最終版以外に中図原本があつたことがうかがわれる。

小図 作られたかどうかも含め全く不明。

幕府提出方法

第九次測量地域の地図を含め、途中経過の提出図が、どのような形で、どの段階まで提出されたかは不明である。天文方まで、当閣僚まで、などが考えられるが、幕府書物奉行の記録では大・中・小図最終版と輿地実測録のみを記している。

第九次測量の環境

忠敬は老齢に付不参加だった。下田を出港して三宅から八丈島までの渡海は順調だったが、帰ろうとすると風が無い。帆掛け船は風がないと走れない。十一日間風をまつて出船したが、八丈から三宅への帰途、風を失い三

日三晩漂流する。ようやく三浦三崎に漂着し、三宅島に戻った。黒潮に流されるとアメリカまで行ってしまう恐れがある危険な測量行だった。伊豆測量の終了後、熱海温泉で二九日間休養。江戸帰着時には伊豆七島の図を持参したと忠敬の江戸日記に記載がある。

六・考察

（1）大谷亮吉の研究の特徴

測量器具については異常に詳しいが、成果物である地図については不熱心である。当時は多くの原始地図史料があつた筈であるが、まとまって収集されていない。

日本学士院に中図八枚の複製図と、意図不明なカナ書き特別小図の複製を残したのみである。十分な研究費（三井財閥の寄付二千元）を持っていたので、最終版伊能図の写真集でも残していたらよかったと思う。忠敬業績に対する見方が必ずしも温かくない。

（2）なぜ、稿本あるいは複製図か

本図は最終版の中図・大図より詳しくて針突法により制作した針穴本である。地名地形の細部では特別大図にはかなわないが、島嶼の関係位置は特別大図では示せない。地域全体図として考えると、最も優秀な伊豆七島図と思われる。

提出図のもとになったから稿本としたのであろうか。稿本という言葉の意味からは下書き、あるいは未完成品のように感じられるが、本図は完成品より詳しいので、いわば原図で

ある。途中経過図がどのような形で提出されたかは分からないが、仮に提出図があったとすれば本図は副本に相当する。

難点はコンパスローズである。他の多くの伊能図と対比した場合、地図面がいかに綺麗でも、コンパスローズが未完成なものは正本でないし、副本としてもグレードが下がる。本図のコンパスローズは完全とはいえない。

副本とは、正本と同じように作られ、控え図として伊能家に残されたり、諸侯などに謹呈された図をいう。ただ、同じように作成されても、完成度には差があるので、伊能家に控えとして残された地図と同等以上の仕上がりの地図を指すことにしている。また、副本と同じように制作されたが、未完成であるとか、試作的な記入がされた図などを区別して稿本と呼んでいる。

一方で、大谷著書では本図を複製図ともいう。大谷の定義では、裏打ちされた用紙を使って針突法で制作したものが副本で、裏打ちの無い用紙を用い針突法で制作したもの、あるいはその後で裏打ちした図を複製図としているが、これは厳密を欠く決め方なので、私共は針突法により制作された地図はすべて、副本または稿本としている。

なぜなら、針穴本でも痛めば、裏紙の打ち直しはいくらでもありうる。副本でも裏打ちをやり直したら複製図に、ということはある得ない話である。現に東博の伊能中図は裏を打ち直されて、針穴は見えにくくなっている。

フランスのペイレ氏旧蔵の中図は裏打ち紙まで針穴が貫通しているが、修理に際して業者から、裏を打ち直させて欲しいと要望されたが、拒否し他の方法で補強をおこなった。

本図も現状保存を重視するなら、全面装丁は適当で無かったと思われる。逆にいうと、大谷には、そこまでの発想が無かったということであろう。

見方を変える。複製図というなら元図がある筈であるが、伊能忠敬記念館には特別大図は残っているが、この図の元図は残っていない。大村藩士峰源助が渋川作左衛門に写させて貰った図が元図かも知れないが、記憶では本図のように地名が詳しくなかったような気がする。

要するに、大谷が、そこまで詮索して稿本といったり、複製といったかどうかは、疑わしいと考えられる。

また、針穴の有無については言及しておらず、稿本とか、複製図というあいまいな表現をとり、伊能隊の作品か他人の写しかという基本的な区分を明確にしていない。あるいは、大谷の入手時にすでに裏が打っており、針穴不鮮明だったかも知れない。

地図の位置付けに関する大谷研究は完全とは思われない。

(3) 結論と期待

本図は、現存する最終版伊能図の伊豆七島部分の原図と考えられる。島嶼個々の地図については、特別大図が残されており、これら

がより詳細であるが、伊豆七島図の場合、各島嶼の関係位置は重要な要素である。

関係位置を含めた伊豆七島図全図としては、現存する大図、中図、小図を通じて、最も精細な地図といえるだろう。本図には元図があったかも知れない。しかし、針穴本であり、そう大きな違いはないと考えてよいだろう。

第九次測量は命からがらの作業だった。幕命でなければ中止になってもおかしくはなかった。

骨休めといつては悪いが、熱海温泉で一ヶ月も休養させている。他の例からみて、忠敬は、だらだら休ませる人ではなかった。地図仕立てを課業として与えたのであろう。それで、帰着のとき、特別大図を持参したと思われる。あくまで推測だが、このとき一緒に中図も持参したと考えてもおかしくはない。

このように考えると、偶々入手した複製図、あるいは稿本などではなく、伊豆七島測量原図といえるような存在と思われる。

本図には特別大図にならって特別中図と名前を付けたいと思う。本図には元図は無く、唯一の特別な中図である可能性もある。

伊能図には、過去に記録されながら、あるいは欠本となって紛失し、所在が不明のものが追記③のように多々存在する。これを機会に多くの伊能図が世の中に出て、然るべき場所に収蔵されることを期待している。

(わたなべ いちろう)

追記① 大谷の箱書き

大谷亮吉氏の箱書の文言 原文

寛政十二年伊能忠敬先生稟公命初実測蝦夷地
爾來連年巡測諸州遂完成全国測量之業
本圖即伊豆七島附近中國之稿本而久失其所在
大正二年秋於東京古書籍展覧會場余偶
發見之加裝丁珍藏 昭和四年六月 於大阪高
等學校 賜天覽之榮 後學 大谷亮吉 識
同 読み下し文

寛政十二年伊能忠敬先生公命ヲ稟ケ、初メ蝦
夷地ヲ実測シ、爾來連年諸々ノ州ヲ巡測シ、
遂ニ全国測量之業ヲ完成ス。
本圖ハ即チ伊豆七島附近中國之稿本ニテ、久
シク其ノ所在ヲ失ウ。大正二年秋、東京古書
籍展覧會場ニ於テ、余、偶、之ヲ發見、裝幀
ヲ加エ珍藏ス。
昭和四年六月 於 大阪高等學校
天覽ノ榮ヲ賜ウ 後學 大谷亮吉 識

追記② 大谷亮吉著書の記述

○文化十二年及十三年の測量により製したる
伊豆東海岸、七島、並に諸街道の地図。
この地図は蓋し文化十三年中に調製を了り
て、當時の詳ならず。若くは上呈したるなら
も、其時大図、小図等の別あり。特に大図、大
図、特別大図、は蓋し伊豆七島に限りて製作し
たるものにして、縮尺一萬二千分一を以て描き
七葉より成り、諸地物の描写形式は普通の
大図の形勢等は一層精細に描出せり。本圖は
蓋し幕府へ上呈せしなるべし。其副本は伊能
家に遺存せり。三萬六千分の一の縮尺を以てし、兩
間に測量したる全地域に亘りて調製したるな
らん。能家に存せし伊豆牛島に對する複製図一葉あ
るのみなり。は二十一萬六千分の一の縮尺を以て伊

豆牛島より七島に亘れる地域を一図幅上に描
出したるものなり。東京古書籍展覧會に於いて
これを購入せしものなり。但しこの複製図には
山島の方位線は夥しく劃せるも経緯線は全く
描画する所無し。小図は中國を二分の一に縮めたるものなる
も、今其所在を詳にせず
(注 大谷亮吉「伊能忠敬」六〇七頁より引
用。青字部分は割注である)

追記③ 行方不明の伊能図

○記録で存在が記されているが、所在がわか
らない伊能図
1. 伊能忠敬記念館関係
寛政十二年小図(縮尺の違う二種類あると
いわれる)いたが(小原大衛資料)、一種類し
かない。
・寛政十二年大図 二倍の縮尺の函館―富川
間の図があるといわれていたが(大谷資料、
小原資料)見当たらない。
・享和二年中國南部の二(房総、伊豆)が
欠本である。中國南部の二(房総、伊豆)が
・文化元年中國南部の二(房総、伊豆)が
本だったという。現在、三枚揃いが一組しか
ない。
2. 岡山藩主池田家旧蔵の伊能中國
昭和二年一月に財産整理の際に売り立て
られ、岡行方がわからず、澤氏が実見してい
るが、島原藩蔵の伊能圖。
3. 島原藩蔵の伊能圖。
弘島原藩蔵の伊能圖。
揚の父と伊能隊員が、箱田左太夫(榎本武
い)の父と伊能隊員が、箱田左太夫(榎本武
4. 東京大学総合研究博物館伊能中國の関東
の部。東京大学総合研究博物館伊能中國の関東
ない。東大に中國一式の売り込みがあったと

5. 都立中央図書館の小図
幕末に老中首座を務めた福山藩主・阿部伊
勢守が天文方に写させたという小図二枚が現
存するが、北海道が欠本。二枚だけ写させた
とは考えにくい。
6. 唐津藩でも伊能に地図を頼んでいた
唐津藩でも忠敬に地図を頼んで、忠敬と謝
札の交渉をしているが、地図は見つかってい
ない。

○大谷以降に発見された主な伊能図

・山口県文書館 毛利領の大図七枚、長州藩
伝来の針穴本
・松浦史料博物館 九州小図一枚、中國西國
海路図三枚、大図編集四枚、すべて針穴本
・国会図書館 伊能図模写本四三枚
・学習院大学図書館 四國測量までの途中経
過の中國写本八枚
・アメリカ議会図書館 最終大図模写本二〇
七枚
・東京国立博物館 昌平校旧蔵、最終小図三
枚揃、針穴本
・徳島大学伊能図 徳島藩蜂須賀家旧蔵、九
州第一次測量までの途中経過の中國針穴本七
枚、九州部分大図針穴本三枚
・フランス中國 最終中國針穴本八枚、現在
日本写真印刷蔵
・静嘉堂文庫 カナ書き特別小図 針穴本一
枚
・都立中央図書館 最終伊能小図写本二枚
・海上保安庁海洋情報部 大図模写本一四七
枚、うち、四枚はこのみ所蔵の貴重図
・成田山仏教図書館 最終中國写本八枚
・長崎市立博物館 文化元年小図写本一枚、
四國中國写本一枚、伊豆七島中國写本一枚、
琵琶湖圖写本一枚、仙台松島部分中國写本一
枚、
・宮城県図書館 途中経過の中國写本四枚

伊能測量現地史料紹介④

尾鷲大庄屋土井家文書(二) 全文紹介(最下段は注記)

―忠敬が知らないところで、心得触れが発行される―

伊藤 栄子

渡辺 一郎

昨十五日御状相届致拝見候、温暖二相成申候
処、弥御安康可被成御勤珍重奉存候、然ハ此
度

公儀天文方役人中御通行之由二而

公儀御勘定奉行衆先触、測量方先触

御老中方御証文共三通箱入、一昨夕御地へ致
着由二て御細書之趣猶又大方今日頃者慥柄
(たしから)組へ被入込候儀も候哉、何分急

候様子二申参候二付、右写し別封二申進候、
御承知可被成候、尤拙者より慥柄組兼帯加藤
甚内方へ申遣候二ハ、勢州筋御通行取扱振ヲ
以早々御申越被下候様申遣候事二御座候、志
州領江被移候迄、白子辺より之様子早ク承度
存候儀二御座候、慥柄組より今一左右(そう)
可申参候得共、聞合二ても遣度奉存候、追々
様子相分り次第可申進候、左様御承知可被下
候

○これまでは、他領を経由した共通な通達を
記しているが、紀州入境が迫って、大庄
屋間の情報交換が始まる。尾鷲の土井徳
蔵の要請に紀伊長島の大庄屋石原が答え
る。

○三領―紀州藩は紀伊三七万石のほかに、伊
勢に、白子、松坂、田丸と三カ所で一八万
石の所領があり、三領と総称する。石原は
長島地区の大庄屋で、紀州領で一番先に測
量が入る白子領の接遇を気にしている。

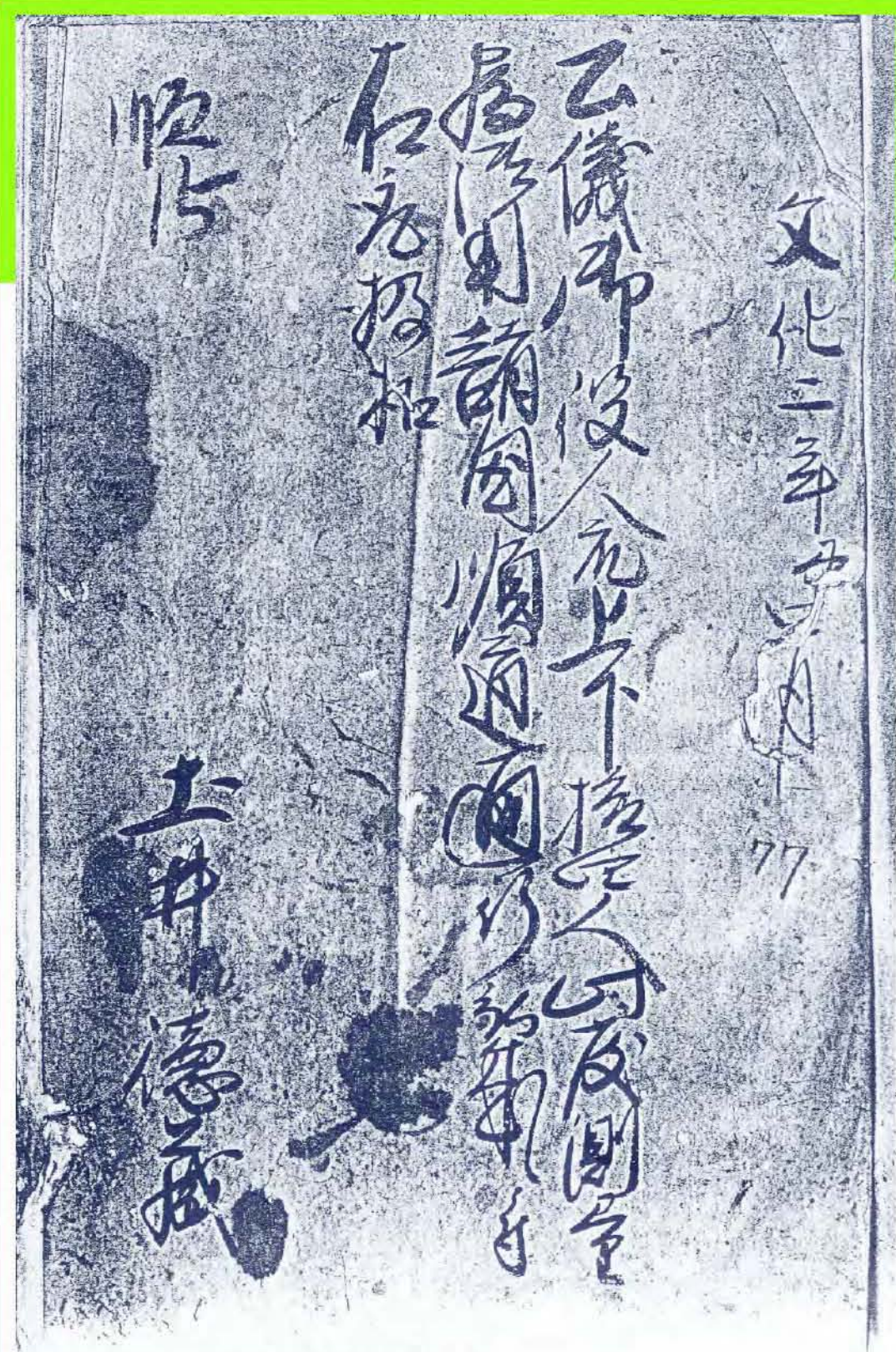
○慥柄組は現在の南伊勢町の南島町周辺で田
丸領。田丸城主の久野丹波守は所領一万石
で、田丸領六万石を支配した。

○新宮は付家老水野家の領地で三万五千石御
通詞は通達か？ 本藩から指示がないのに
不満を持つ。また、三領における藩役人の
付き添いを心配する。

○郡への賦課の打ち合わせに召集されている
が、測量の準備に差し支えるので、延期
してくるよう、木本代官所の地元大庄
屋から掛けあってくれよう別封で依頼
する。

○加藤甚内は慥柄組の大庄屋。加藤の案内で
は足らないので、この手紙となった。

土井家文書の表紙



一郡割当廿二日揃候御通詞ニて御座候、左候得ハ当組廿日頃よりも出かけ可申積二御座候、然所御申越被下候通尚又御用二指支候儀二御座候、依之右之段別封二御相談申達候、猶貴所様よりも濱地御氏へ御内談可然奉頼候、右貴報申達度如此二御座候、

恐惶謹言

四月十六日

石原次左衛門

土井徳藏様

一天文方役人中廻国有之由、先達而御通詞出候事二御座候、右役人中当月十一日桑名より四日市へ被移候趣二御座候、無程志州へ被移当組通行可被致奉存候、夫より御組へ移被申候儀二可有之、頃日先触も相廻り候由組下より申出候事二御座候、定而追々御承知之儀と奉存候得共、当組へ被移候ハ、猶模様直二申進候得共、先追々近寄候様子申進度如此二御座候、以上

四月十四日

加藤甚内

石原次左衛門様

本文之通長嶋組より申越候二付、致順達申候、右者大御用之儀大庄屋不居合候而ハ手配等も如何二候間、郡割勘定二致出勤之儀御猶予被下候様、乍御苦勞御元より御願可被下候、然共右御用之儀ハ不苦候間、是非出勤致様被仰下候得ハ、庄屋共ニ与得（とくと）申置出勤可致候得共、可成儀二候ハ、御猶予奉願度奉存候、御伺之上早々否御申こし可被下候、仍

之右御報も傍得御意可申候 以上

四月十七日

土井徳藏

濱地善之丞様

天文方役人中通行之儀二付、昨日村継ヲ以得御意候事二御座候、右者志州勢州領之内へ被移候儀相知れ不申候哉、加藤甚内方より何等不申参候二付、当組二鄉村肝煎吉兵衛慥柄組迄聞合ニ差遣し候、其内慥柄組より之様子相知次第追々可得御意候

一人足継之儀宿継候様二御先触有之候得共、宿継と申ハ東海道辺之事ニ而譬ハ此辺二而ハ長嶋之宿より三浦之宿迄と申事ニ而も可有之哉、左候得ハ古里道瀬（ふるさとどうぜ）と申間之宿ヲ除キ三浦之宿ニて継立之儀ヲ宿継と申儀と相察候段、村役人中之内申出候事二御座候、熊野之儀ハ難所之坂数



土井家文書関係地域図

○慥柄組の加藤からの情報は通り、遍だった。通達は出ましたよ。うちに来たら様子を知らせるよ、では情報にならない。

○土井が大庄屋の賦課打ち合わせ会延期の交渉要請を送った同じ日に、長島組ではたまりかねて、慥柄組へ聞き合いのため村役人を派遣した。

○宿継ぎといっても、東海道筋とここでは全く違う。村役人と相談してこんな風にしたと思うけど、計画の内容を詳しく述べて、速水組にも同調を求めている。

○至極尤もな意見で、伊能測量は現場の応変の協力があって成り立ったと思われる。

之事二付、当組之儀ハ組継二取計申度御陸通り二も候ハ、長嶋組よりハ相賀（あいが）組馬瀬（うまぜ）村継二取計、御渡海二候得ハ白浦迄之御渡海二取計、白浦より矢口浦迄陸人足二而継立申度、右両様相決申度段村役人中申出候間、相賀組人足右之御心得ニて馬瀬村へ御揃させ被成候様致度候、若御渡海二相成候ハ、矢口浦よりも御渡海可被成儀も難計候間、相賀組船矢口浦へ御揃させ被成候方可然と奉存候 右二付当組之儀ハ凡人足百人程用意致させ、船之儀ハ凡十八艘用意致させ候筈ニ御座候間、左様御心得させ可被成候 右之趣大井、浜地両御氏へも御通達御座候様致度候 依之申進候 以上

四月十七日

石原次左衛門

速水忠助様

別紙之通石原次左衛門方より申来候由ニて、速水忠助方より差越候二付さし進申候

右ハ長しま組より申来候通り、陸通り二候ハバ、組継二致し、此方よりハ八木山越、三木、名柄（なから）迄持届可申候 渡海二相成候ハ、此方より九木、早田（はいだ）、同所より三木浦迄乗付けさせ可申候間、左様御心得被下御用意可被下候

郡割当廿二日揃候御通詞ニて御座候 左候得ハ当組廿日頃よりも出かけ可申積ニ御座候然所御申越被下候通、尚又御用二指支候儀ニ御座候 依之右之段別封ニ御相談申達候 猶貴所様よりも浜地御氏へ御内談可然奉頼候

右貴報申達度如此ニ御座候

恐惶謹

四月十六日

石原次左衛門

土井徳蔵様

天文方役人中廻国有之由、先達而御通詞出候事ニ御座候 右役人中当月十一日桑名より四日市へ被移候趣ニ御座候 無程志州へ被移当組通行可被致奉存候 夫より御組へ被移申候儀ニ可有之、後日先触も相廻り候由、組下より申出候事ニ御座候 定而追々御承知之儀と奉存候得共、当組へ被移候ハ、猶模様直ニ申進候得共、先追々近寄候様子申進度如此御座候 以上

四月十四日

加藤甚内

石原次左衛門様

御代官様ニも明日、明後日之内ニハ御役所御帰着可被成候奉存候 後日得御意候通り拙者共郡割廿二日揃候儀、如何致可申哉

公儀御役人衆之事ニ候得ハ、右御用致手配鹿（ソ）末無之様致度存候 右御通行相济候迄出勤御猶予奉願度、其内山方組揃候而郡割始候ハ、相济次第出勤致可申候 右急ニ御同被下、急村継ニて御申し被下候様奉願上候 最早当辺御移り二間も有之間敷存候事御座候 右之段得御意度如此御座候 以上

四月十八日

土井徳蔵

浜地善之丞様

○石原組と速水組の合意は成立。土井氏に郡賦課会議の延期要請を木本の浜地氏に頼んで呉れと、再度の催促。

○慥柄組からは、十一日に四日市に入ったことを十四日付で知らせてくる。依然としてとぼけた連絡情報である。

○代官所は代官不在だったらしい。帰ったらすぐ決めて欲しい。測量隊入領に間がないから、急村継ぎで結果を知らせて欲しい、と催促する。

追々得御意候

公儀測量方御役人中御通行二付、当月八日出東海道四日市宿問屋年寄より出し候廻伏、昨十九日子上刻長島へ着致し候二付、写取即刻持させ候

右廻状之外二御尋二付、書上帳案文と書記、御豎帳壺冊相添有之候 右帳面二有之候ハ高何程、宿内町長何丁何十間、同往還并木何丁何十間、家数何軒裏町裏家有無、人別男女何人、御朱印何宮社領何程神主名前、御朱印何程何宗何寺外何ヶ寺、何宗何寺同何寺修驗何人何院、名山古跡有無、右之通宿高、町長先家数人別寺院書面之通相違無御座候 以上

誰領分何国何郡何宿、問屋だれ、庄屋だれ、年寄だれ印形致し差出候筈二、御案文帳面相添有之候 右株々御代官様へ御伺不申上候而ハ、容易二達し取組も出来かたく御座候に付、右廻状并御案文帳面共写させ、帳書壺人御伺二差出し申候 夫二付各様御手前御了簡も承度奉存候二付、帳書立寄せ申談候様申聞候間、右廻状並帳面共御一覽之上、思召も御座候ハ、相賀、屋鷺両組帳書中壺人ツ、御指出し被成候而、木本(キノモト)二而浜地御氏より直々御代官様へ御伺被下度奉存候 両組之儀ハ勢州境之儀二付、別而心遣ひいたし候間、浜地御氏より早々御伺被下候上、両組帳書御手廻早々御戻し可被下候 依之得御意申候

以上

四月廿日

石原次左衛門

速水、土井、浜地 宛

尚々本文御調へ之儀ハ、去々亥年御案紙ヲ以被仰出有之候二付、郡割会合之節組々より帳面出し候事二御座候 右御承知之御事二候得共申進候、 以上

御測量御用

東海道

廻状

四日市宿

外二

書上案文添

伊勢路志州紀州

泉州摂州大坂迄

以廻状得御意候 然ハ兼々御触御座候測量方御役人伊能勘解由様、高橋善助様、市野金助様、坂部貞兵衛様此節佐屋路御測量御見分御座候二付、昨七日御泊所尾州鳥ヶ地(とりがんじ)新田へ当宿より為御用伺罷出候処、明九日桑名御泊、十日御用向御取調二付、右宿御逗留、十一日当宿御泊旨御越被成候間被仰渡候、夫二付右御用先キ諸道具持人足、村毎二継替候而ハ不最通二候間、御泊所より御泊所迄都而通し人足二致、其間村々割合二致可申積、尤も往還通と海辺と二夕手二御分り、御泊所ハ毎夜往還宿内へ御一所二御止宿被成候間、左様御心得可被成候、且又御泊所難定候二付、毎夜御泊所より一日分ツ、御先触御指出し被成候間、前晚御泊所へ宿村共御用伺として、御出役可被成候、依之右御見分先キ入用人足有増(あらまし)左二申進候

○測量隊が四日市宿に、大阪まで順達せよと命じた心得触れが十九日子の上刻というから夜中の一時頃長島組に到着した。

○心得触れの書き上げ(案)には、家数、人別など代官に伺わないと出せないことが書いてあった。石原は緊急対応に動く。

帳書(事務方?)を一人伺わせる。貴方の意見も聴かせてもらって、相賀、尾鷲の帳書をつれて木本の大庄屋浜地から代官に交渉していただき、帳書どもを早々に御戻し下さいと。

○結果的には、人別、家数は答えないと裁定された。これまで加賀藩が人別、家数を答えなかったとよく言われるが、幕府直営事業となった第五次測量の、しかも親藩御三家でも拒否したのであるから、加賀藩の例はおかしくなかったことが分かる。

○四日市宿からの心得触れである。伊能隊の指示で、大阪までの村々に順達するようにいわれて送られた。

人足を村継ぎでなく、宿継ぎにしてほしい。前夜、書き上げ帳を持って御用伺いに出る、必要な人足はこのくらいだ。という内容である。

土井家文書の原文

- | | | |
|---------|--------------|-----|
| 一 前後差図人 | 是ハ羽織着用
三人 | 右同断 |
| 一 刀持 | 六人 | |
| 一 床机持 | 壹人 | |
| 一 かます持 | 貳人 | |
| 一 竿持 | 壹人 | |
| 一 箱持 | 壹人 | |
| 一 台持 | 三人 | |
| 一 くさり持 | 貳人 | |
| 一 ほんてん持 | 四人 | 覚 |

- | | |
|----------|----|
| 一 両掛壹荷 | 壹人 |
| 一 明キ乗物壹挺 | 四人 |
| 一 先キ払 | 貳人 |
- 右之外二
- 野風呂手炉等之人足用意可被成候 以上
有増右之通御心得可被成候、且右御用二
付、宿村書上帳別紙案文差進候通御仕立、前
晩御泊所へ御用伺之節、御持参可被成候
右之趣神戸（かんべ）より伊勢路通宿村並
海辺村々志州鳥羽迄、夫々紀州熊野路へ御懸
り大坂迄之所、当宿より心得触差出可申旨、

人数はこのくらいで済めばいいな、と思える数で特に過大ではない。

○しかしこの心得触れは、大きな問題を含んでいた。①あとでわかるのだが、忠敬の許可なしに隊員が出させたものであること、および②お証文の枠を超える人足を要求していることである。

○台持ちは象限儀の台持ち。かますは鉄鎖を入れる。野風呂は携帯用の湯沸かし、小さなお風呂の形をしていた。両掛は忠敬の衣装などを収納。乗り物は忠敬の現場までの乗用だが、救急車を兼ねていた。

○形通りの発信者と宛先である。このようにローカルの宿場が依頼されて発した通達が、紀伊半島の浦々を一周して、大阪まで達するのは、驚きである。

被 仰渡候二付、此段得御意候、 右廻状右
往還通宿村並海辺村々不洩様大坂迄早々順達
可被成候 以上

割印 丑四月八日 東海道四日市宿

問屋

年寄中

須(カ)田村 赤堀(アカホリ)村 御料私
領日永(ヒナガ)村 馳出(ハセダシ)村

塩浜村 六呂見(ロクロミ)村 泊村 大

治田(オオバタ)村 小倉(オグラ)村 楠

(クス)村 川原田(カワラタ)村 高岡村

神戸(カンベ)但 往還通村々海辺通村々

白子(シロコ) 右同断

上野 右同断

津 右同断

松阪 右同断

小俣 但 志州鳥羽迄往還村々海辺村々

志州鳥羽夫より

紀州 熊野浦通り

和歌浦

泉州 堺

摂州

住吉

大阪西川口迄

右往還通宿村々

海辺通村々

問屋

庄屋 衆中

追而申入候、神戸より先大坂迄往還通海
辺ヲ通二行有之場所ハ、御手分二相成候間、
宿方より向寄之海辺村々不洩様、先宿迄順能
添書被成御廻可被成候、尤右御用方御証文人
馬御触書等之儀ハ、先達而順達之節御拝見御
心得可被成と存候

以上

伊豆七島中図などの入札結果について

伊能図競売という珍しいイベントに、お節介をして、報道機関向けに解説をしました。当日の報道面は、織田信長の妹・お市の手紙と推測される戦国書簡に人気が集まりました。NHKが、大河ドラマとの関係も深いのでお市の手紙をメインに取り上げ、各社が追随したようです。

聞くところによると、お市の手紙で明白に確認されたものは、まだ一通もなく、筆跡鑑定はできないのだそうです。状況証拠と

「い」という一字の署名をもとに可能性が高いとされました。その位のお話ですが、新発見というのがニュース・バリューでした。

一方、伊豆七島中図の方は、別稿のように説明しましたが、報道では、お市メイン、伊能図サブというような扱いが大勢でした。そのなかで、毎日新聞だけが、総合面で伊能図をメインにして、国宝級と報じていました。

お市の手紙に？を付けたわけです。記者の佐藤編集委員は両方の会見に出ています。私にも厳しく質問していましたから、文化部でも熟慮協議の上だったと思います。見解に敬

○あらためて、江戸期の村落の自治能力、通信機能、情報収集力に敬意を表したい。ついでに言えば、警備力もあつて、先払い、門番、火の番なども村人が務めた。指揮者は脇差を帯び、番人は股引支度で棒を持った。

村役人が指揮し、昼夜を問わず御用があるときは駆けつけられるよう、身支度をして待機する緊急対応部隊も用意された。これなど現代で言えば警察の機動隊である。

なかなか通説を覆す「忠敬と下役市野が衝突した尾鷲事件」にたどり付けないが、しばらくお付き合いください。

(いとう えいこ・わたなべ いちろう)

意を表します。実際、伊能忠敬記念館にあれば、国宝指定は確実だったと思われる。

さて入札結果ですが、両方とも札は入ったようですが、落札されなかったそうです。古典会としては、落札の有無、価格については、一切公表しないのでこれは伝聞です。

出品価格は結構高かったということでしょう。伊豆七島中図は、十分吟味して価格設定したといえますから、そういう価格でしかるべき機能にお買い上げいただけるといいなと考えています。

(渡辺一郎)

伊能測量現地史料紹介⑤

第四次測量隊、中能登を行く(二)

―「真館覚書」より―

河崎 倫代

・測量隊は海辺筋を第一として、出張った岬や島々へ渡ることもある。舟を用意すること。
・宝達山・高爪山・

石動山などの高山と、末森・元七尾などの古城跡を見当てにするかもしれないから、その近くの駅や道程・方角などを調べておくこと。

・越前の三国、加賀の本吉・宮腰・黒津舟・白山、能登奥郡の高巢山・甲丸山・小木・宇出津・輪島、佐渡国小木湊、越後国新潟湊、越中国立山・伏木・放生津・氷見等の船着所、各駅などの方角・道程も知っておくこと。

それでは、前号に続いて石川県立図書館蔵田中文庫「真館覚書」の解説と口語訳を試みたい。今回は、平山郡蔵隊(三名)による能登半島西岸部(通称「外浦」)測量である。天文測量器具一式は忠敬隊(五名)が持参し各地で夜間測量を行ったが、郡蔵隊は「地平佳儀」(中方位盤)を使用し遠山等の方位を測った。第四次測量からはより軽便な「半円方位盤」も用いられたのだが、少なくとも加賀藩では、どの報告書にも「半円方位盤」は登場しない。参考までに、現存する報告書等に記載されている測量器具類の一覧表を作成した。

はじめに
享和二(一八〇二)年三月、加賀藩に新藩主が誕生した。十二代前田斉広である。斉広は後に、蘭方医の登用、精密な時刻制度の採用、金沢町測量・町図作成などを実施して、明治期に至る科学技術分野の土壌を準備した藩主として知られる。忠敬に加賀藩領内の測量手伝いを願い出て了承されながら、藩庁の不許可によって叶わなかった西村太冲(麻田剛立の弟子。本誌第二八・三十号で紹介)も、文政四(一八二一)年以降は斉広政権下で大いに活躍している。測量隊来藩の件は、就任直後の新藩主の耳には届いていなかったのかもしれない。「もしも斉広の耳に届いていたら、加賀藩の対応は・・・？」と、想像してみたくもなる。

しかし、加賀藩における伊能測量隊のキーワードは、「隠密まがしき」と「元百姓・今は浪人」であった。「村高・家数は答えるな」「重き扱いには及ばず」という指示を受けた十村たちだが、直接の担当者として、万が一にも「幕府御用」に差し支えが出ては一大事である。他藩・他地域の情報も得て、次のような具体的指示を配下の村々へ出した。

	新田書上帳	真館書上帳	真館覚書	高島厚定職事日記	石黒信由「測遠用器之巻」
間縄	金くさり	鉄くさり・くさり	鉄くさり・くさり	鉄くさり	×
杖先方位盤	磁石	磁石	磁石	磁石	磁石
望遠鏡	×	遠目鏡	遠目鏡	×	×
中方位盤	×	地平佳儀	地平佳儀	ちうほうい	地平圭器
象限儀	×	×	×	象限儀	象限器(儀)
量程車	箱を引く	×	×	×	×

(記載がない器具は×印で示した)

- ※「高島厚定職事日記」(金沢市立玉川図書館蔵)は越中国砺波郡今石動奉行所の今石動等支配を務めていた高島厚定の職務日記である。
※「測遠用器之巻」は、越中国高木村の測量家石黒信由が伊能測量隊に同行した際の記録を含む。

一、田中文庫「真館覚書」解説文

―今浜村から黒島村まで

(平山郡蔵隊)―

一、前段之通、今浜村より手分、外筋えは平山群蔵上下三人被当向、今浜村領中駿竹之所よりくさを引被申、新沢村にて末森山を指、古城跡跡に相見へ候、何と申候哉と被相尋候二付、末森古城跡と申伝候段、手代共答候所、城主何と申候哉と被尋候得共、しかと不奉存旨相答候

一、塵浜村領家建の下、海辺にて磁石を居、其所に竹を被建、測量御用と申札を付、夫より村寄の方々も竹を二本被建、此竹、兎共抔徒に抜取申義も難計候間、左様之義無之様有度旨、被申聞候二付、手代共より番附置可申旨、申達候處、宿藤兵衛方え被致着候

一、塵浜村宿藤兵衛方取持に罷越居候羽咋村又八郎え、頃日測量御用先え罷出候は大庄屋下役に候哉と被相尋候二付、左様と相答候所、手代共名前被相尋候二付、名前申達候處、大庄屋は十村にて可有之と被申聞、羽咋郡は一人の支配かと被相尋候二付、左様にてても無御座と答候得者、名は何と申候哉と被尋に付、北村太郎右衛門等に御座候段申達候

二、田中文庫「真館覚書」口語訳

※ 逐語訳では分かりにくい箇所は、意識を試みた。() は筆者の補足である。

一、前述の通り、今浜村(宝達志水町)より手分けし、外浦筋へは平山群(郡)蔵ら三人が向かった。今浜村領内に立てた駿竹の所からくさり(間鎖)を引かせた。新沢村では末森山を指して、「古城跡のように見えるが、何とこののですか」と尋ねられたので、「末森古城跡と申し伝えられています」と手代どもが答えたところ、「城主は何と申しますか」と尋ねられたが、「しかと存じません」と答えた。

一、塵浜村(羽咋市千里浜町)領の家建の下、海辺で、磁石を据え置き、そこに竹を建てて、「測量御用」と書いた札を付けた。村寄の方にも竹を二本建てて、「この竹を子供などがいたずらに抜き取ることがないようにして下さい」と申されたので、手代どもより「見張り番を付けて置きます」と申し上げたところ、宿所の藤兵衛方へ着いた。

一、塵浜村の宿所藤兵衛方へ接待に罷り越した羽咋村(羽咋市)又八郎へ、「測量御用先へ罷り出てきたのは大庄屋の下役ですか」とお尋ねに付き、「左様です」と答えたところ、手代どもの名前を尋ねられたので、名前を申し上げた。「大庄屋は十村である」と申し聞かされた。「羽咋郡は一人の支配

ですか」とお尋ねに付き、「そうでもありません」と答えたところ、「名は何といいますか」とお尋ねに付き、「北村太郎右衛門等でございます」と申し上げた。

塵浜村の献立表

「能登輪島住吉神社文書」の「天文方御役人御巡行巻」に、塵浜村で平山郡蔵隊に出された食事の献立が記録されている。

《五日夕食》

向(指身||ばら・白藻・より天・辛子酢)
平(玉子・あんかけ・わさび)
汁(すまし||巻きす・みょうがの子)
焼物(一塩鯛) 御飯 香之物

《五日夜食》

スイカを食べた！
平(かき貝じぶ・山椒粉)
小皿(ぼら付焼き) 御飯 香之物
後席 西瓜

《六日朝食》

向(指身||けし酢・伊勢鯉・三嶋のり・ひじき)
焼物(鯖筒切)
平(かまぼこ・くわい・京麩)
汁(かき貝・青柚・大根おろし) 香之物

一、同夜手代共罷出候處、六日柴垣村昼、大念寺新村泊に相決し、宿觸被当出候、且又瀧村より海上え出候間、手船用意置候様、被申聞候二付、舟三艘申付置候

一、六日塵浜村出立、驗竹被建置候所より段々測量有之、羽咋川尻舟橋の所にて磁石を居、所々高山被見当候様、瀧村に右之通、船用意仕置候得共、波打際通り測量有之、海上え不被罷出、同村領山の崎にて宝達山并海士崎・五石ヶ峯等、遠目鏡を以被見請、磁石様の物被出、方角・山高低見被申、是は地平佳儀と申物の由、手代共え被申聞、夫より測量有之、柴垣村宿与兵衛方え着、暫昼休、出立、同村長手嶋え被相渡、遠目鏡を以所々被見請候

一、同日、川尻川迄測量有之、川の名被相尋候二付、川尻濱と相答申候

一、同日、大念寺新村宿又三郎方着之上、又三郎え一宮神号被相尋候二付、慥には不奉存候得共、氣多大明神と承り候段、申達候處、瀧谷の寺は何と申候哉と被相尋候二付、金栄山妙成寺と申達候

一、同夜、手代共宿え罷出、翌七日泊所等之儀、夫々申達候處、赤住村昼、福浦村泊に相決し、宿觸被相渡候、

一、同夜、手代どもが罷り出たところ、六日は柴垣村で昼食、大念寺新村で宿泊と決まり、宿觸れを出した。瀧村から海上へ出るので手船を用意するようにと申し聞かされたので、舟三艘を申し付けた。

一、六日、塵浜村を出立し、驗竹を建て置いた所から測量を始めた。羽咋川河口の舟橋の所で磁石を据え居き、所々の高山を見ていた。瀧村（羽咋市瀧町）に船を用意しておいたが、波打際を通り測量したので、海上へは出なかった。同村領山の崎で、宝達山・海士崎・五石ヶ峯（基石ヶ峰）などを遠目鏡で見、磁石のような物を出して方角・山の高低を見ているようだった。これは「地平佳儀」という物だと手代どもへ申された。それより測量して、柴垣村（羽咋市柴垣町）の昼宿の与兵衛方へ着き、しばらく昼休みをとった後で出立した。同村長手嶋へ渡られ、遠目鏡を以て所々を見ていた。

一、同日、川尻川まで測量があり、川の名前をお尋ねに付き、川尻浜と答えた。

一、同日、大念寺新村（志賀町高浜町）の宿所（佐渡屋）又三郎方へ着いた上で、又三郎へ一宮の神号をお尋ねになった。「しかとは存じませんが、氣多大明神と承っております」と申し上げたところ、「瀧谷村の寺は何と申しますか」とお尋ねになったので、「金栄山妙成寺と申します」と申し上

げた。

一、同夜、手代が宿へ罷り出て、翌七日の泊所等を申し出たところ、赤住村で昼食、福浦村宿泊と決めて、宿觸れを渡した。

八月二十八日（日）、平山郡蔵隊の手分測量ルートをとどてみた。宝達志水町今浜から千里浜なぎさドライブウエー（日本で唯一、車やバスで波打ち際を走行できる砂浜）を走り、伊能図にも出てくる羽咋川河口（川幅約四〇m）を一望した。「真館覚書」によれば、河口付近に舟橋が設けられ測量の便宜が図られた。近年、浸食が進んでいるため、伊能図に描かれた海岸線は現在よりかなり沖合いにあったと推定される。次に、千里浜公民館参事吉野さんの案内で瀧町を訪れ、実際に宝達山・基石ヶ峰・海士崎が見えることを確認した。山名などは地元民の案内無しでは判明しないことを実感し、吉野さんに感謝した。志賀町に入ると、郡蔵たちが見た安部屋の弁天島灯明堂が、今は安部屋漁港灯台として往時を偲ばせる姿で立っていた。また、生神村海辺の織子島（現在は機具岩という）は、海士崎を背景に絶好の観光スポットとして、その姿が確認できた。地頭町での測量隊の宿所室屋理左衛門家は、数十年前にこの地を離れ、子孫の行方も知れないという。

（石川県支部 相良文昭）

一、七日大念寺新村出立、瀧谷村は海辺へ領続居候哉と、手代共に被相尋候二付、海辺村にて無御座旨申達候、

一、同日安部屋村領出崎にて、大福寺山・海士崎等、地平佳儀を以被見請候、夫より段々測量有之、赤住村昼宿久右衛門え着、暫休足、出立、浦筋所々磁石を被建、福浦村宿吉右衛門方え着被致候上、手代共罷出富来まで海辺の様子申達候所、少風高にても致逗留兼候間、岩石等出張候て、難見へ場所有之候ハ、大凡見図の趣墨引いたし、為見候様、被申聞候二付、其儀者手代共式調急候、尤、陸通り御巡行有之候ても、大抵は出崎も見へ可申候間、何れにても明日御出之上、御見請難被成所々も御座候は、舟にて御巡行可被下候旨、申達候處、其通可致と被申聞候二付、翌八日富来迄の間、昼所に可仕家建も無之、牛下村辺にて野弁当の図、泊所は地頭町に仕度段、被申達候處、其通宿觸出申候

一、八日朝、雨降申二付、暫時猶豫、出立、福浦村両澗の間測量有之、同村領めなふ浦と申所にて、鷹巢岩并澗口等、地平佳儀を以被見請、出張申所々は群蔵留書被致候躰にて、牛下村領海辺に小屋を懸け、握り飯指出暫休足、出立、段々測量有之、地頭町え着被致候

一、七日、大念寺新村を出立した。「瀧谷村（羽咋市滝谷町）は海辺へ領が続いていますか」と手代どもにお尋ねに付き、「海辺の村ではございません」と申し上げた。

一、同日、安部屋村（志賀町安部屋）領の出崎で、大福寺山（高爪山）・海士崎等を地平佳儀で見っていた。それより段々と測量して、赤住村（志賀町赤住）の昼宿久右衛門宅へ着いた。しばらく休息して出立し、浦筋の所々に磁石を建てて測量した。福浦村（志賀町福浦）の宿所（高橋屋）吉右衛門方へ着いたので、手代どもが罷り出て、富来までの海辺の様子を申し上げたところ、「少し風が強くても（測量を中止して）逗留するわけにはいけないので、岩石などが出っ張っていて見えにくい場所があったら、大よその見取り図を墨引きして見せて下さい」と申し聞かされた。「その儀は手代どもが急ぎ準備いたします。しかし、陸路を通って巡行されても、大ていはいは出崎も見えますので、何れにしても明日お出での上で見えにくい所があったら、舟で御巡行下さい」と申し上げたところ、「その通りにして下さい」と申された。翌八日、富来までの間は昼所に適した家建もなく、牛下村辺で野弁当のつもり、泊所は地頭町にしたいと申し上げ、その通りに宿触れを出した。

一、八日朝、雨が降っていたので、しばらく待つて出立した。福浦村（志賀町福浦）両

澗（水の澗と大の澗）の間を測量し、同村領めなふ浦（女の浦）と申す所で、鷹巢岩と澗口などを地平佳儀で見っていた。出っ張った所は郡蔵が何か書き留めていたようだった。牛下村（志賀町富来牛下）領の海辺に小屋を懸け、握り飯を差し出してしばらく休息し出立した。段々に測量して地頭町（志賀町富来地頭）へお着きになった。

加賀藩と糸魚川藩―舟橋について―

藩への報告書「真館書上帳」には、「大雨や高波などのため海辺ではなく通常の道路を案内した場合は、もう一日逗留して河口付近で測量し直すこともあるらしいので、北川尻川・羽咋川では、在り合わせの漁船を寄せて古板を渡し、仮の舟橋を設けた」とあり、測量隊の延泊を避けたい地元側の思いが伝わってくる。このように、加賀藩十村たちが測量隊の情報を収集して、地元負担を軽減し測量隊とのトラブルを避けるために周到な準備をしたのに対し、糸魚川藩では上流の街道を案内して忠敬との間でトラブルを引き起こした。「幕府御用」への対応に大きな差があったといえよう。

一、地頭町宿理左衛門方え手代共罷出、翌九日通行筋之儀申達候上、風無村昼、鹿頭村泊相決、宿觸出申候

一、九日、地頭町村出立、領家町村浜より測量有之候處、風戸村領切崩に付、舟にて測量有之、風無村え被移、同村又四郎方昼休、夫より段々測量、所々に磁石を立られ、鹿頭村宿彦助方え着被致候上、今日通り筋に茄子原と申家建の所は一村に成候哉と、給仕之者え被相尋候二付、風無村の内小名と申達候、且又大福寺山は酒見村より一里余も有之候哉と被尋候二付、夫程も可有之哉と相答申候

一、十日、鹿頭村出立、測量有之、笹波村領源徳ヶ端にて、大福寺山・深見村猿山、其外、海士崎等磁石を以被見請、前浜村関野にて暫休足、鳳至郡え被移、劔地村昼、御預所黒嶋村泊に候、依而郡境にて、手代共暇乞、罷歸申候

黒島村はもと天領。測量時は加賀藩御預所だったので、御預所下役の藩士が出て案内した。宿所の森岡屋又四郎家は曹洞宗大本山總持寺御用の鑑札を持つ回船業者で、十三代藩主斉泰の能登巡行では本陣を務めている。加賀藩では十村の手代と村役人が案内し、宿所も多くは村役人クラスの家だったのに比べると、御預所では「幕府御用」としての待遇がなされた。

一、地頭町の宿所（室屋）理左衛門方へ手代どもが罷り出て、翌九日の通行筋の件を申し上げた。風無村で昼食、鹿頭村で宿泊と決めて、宿觸れを出した。

一、九日、地頭町村を出立し、領家町村（志賀町富来領家）の浜より測量をしていったところ、風戸村（志賀町西海風戸）領が切崩の崖なので、舟で測量した。その後、風無村（志賀町風無）へ移られ、同村の（畑中）又四郎方で昼休み。それより段々に測量。所々に磁石を立てられた。鹿頭村（志賀町鹿頭）の宿所（木下）彦助方へ到着された。「今日の通り筋にあった茄子原という家建の所は一村ですか」と、給仕の者へ尋ねられたので、「風無村の内の小名です」と申し上げた。さらに「大福寺山（高爪山）は酒見村より一里余りもありますか」と尋ねられたので、「それ程もありましようか」と答えた。

一、十日、鹿頭村を出立し測量した。笹波村（志賀町笹波）領の源徳ヶ端（玄徳岬）で、大福寺山・深見村猿山、海士崎などを磁石で見っていた。前浜村（志賀町前浜）関野（松本清張『ゼロの焦点』で知られるヤセの断崖の北方に関野鼻がある）でしばらく休息し、鳳至郡へ移られた。劔地村（輪島市門前町劔地）で昼食、御預所の黒嶋村（輪島市門前町黒島町）で宿泊するので、郡境で手代どもは暇乞いをして帰ってきた。

三、郡蔵を描いた「群青の人」

今回は平山郡蔵隊の測量コースを、千里浜から黒島までたどってみた。この時の郡蔵を主人公にした小説がある。本誌四七号で紹介した能美龍一郎氏の「群青の人」だ。現在、中日新聞ホームページ上で読めるので、「群青の人」で検索してみてほしい。

輪島市門前町黒島は二〇〇七年三月二十五日に発生した能登半島地震の被害が大きかった地域である。四年半を経てようやく修築・新築家屋が軒を並べるに至ったが、新たな町並みの間に点在する更地が、奥能登の厳しい現実を物語っている。

（かわさき みちよ）



郡蔵隊が宿泊した黒島の森岡家…今は空き家

平山郡蔵らが歩いた中能登の現風景



千里浜なぎさドライブウェイ



滝港から見える基石ヶ峰



安部屋の「弁天島に灯明堂あり」



織子(はたご)島…今は機具(はたぐ)岩



富来地頭町・室屋家跡地の洋品店



大福寺山…高爪山 通称・能登富士

忠敬に信頼された測量先の協力者たち

福岡の国学者・青柳種信のこと

渡辺 一郎

はじめに

忠敬は測量先で出会った有能な案内人をこのうえなく丁寧に出会し、親しく交わっていた。私が地元史料を読んでいて出会った人物に、富山の石黒信由、浜田藩士土井倅助、徳島藩士岡崎三蔵、福岡藩士青柳種信などがある。たまたま福岡の井上会員から筑紫史談六二号（昭和九、八、三〇発行）写の提供を受けたなかに、筑前の国学者として著名な福岡藩士・青柳種信自身の記録が記されていたので紹介する。

青柳は通称を勝次といい、柳園と号した。六石三人扶持の下級武士の家に生まれたが、一七八二年（天明二）一七歳のとき、江戸藩邸詰めを命じられて出府。四年間江戸に住み、藩主侍読・井上南山に儒学を学んだ。一七八九年（寛政元）、ふたたび江戸詰めの命を受けると、道を伊勢路にとって松坂の本居宣長の下にいたって入門し、鈴の屋門下として江戸に着いた。在府中、賀茂真淵門下の高弟と交わる。その頃、香取神宮、鹿島神宮にも遊んだことがあるという。以後国学の研鑽につとめ、筑前における国学の始祖となった。一八〇八年（文化五年）青柳は、浦奉行井手勘

七のもとで浦方付き頭取となっていた。

内容は房総資料に紹介されていたので承知していたが、青柳本人が記した文章は別な意味もあるのとおりあげる。資料の題名は『筑

前国学の泰斗青柳種信年譜の梗概』で、著者は大熊浅次郎、依拠した文献は柳園年譜という。【註一】

以下原文に、多少読みやすいよう、手を加えたものである。

七月公儀御測量方伊能勘解由殿（天文方高橋作左衛門殿手附御小人十人組の由、生国は下総国香取郡）助役坂部貞兵衛殿、手附永井甚左衛門、今泉又兵衛、門谷清次郎（以上三人は天文方同心也浅草天文屋敷住居の由）同内弟子尾形謙次郎、右之面々御領内海邊測量有之候間、右御手当附廻り被申付、御浦方出入山田宇平致同道、小倉御境目に罷出候（但大庄屋庄屋大勢召連候事）浦々嶋々無滞廻浦相済、八月恰土郡御境目切にて引取候事。

一八一二年（文化九年）伊能忠敬が測量にくると、藩命により御手当附廻りを命じられ、浦方出入・山田宇平を同道し、大庄屋、庄屋など多数を召連れ、小倉境に出迎えた。青柳は都合三回忠敬に付廻ったが、最初の付廻りである。

右廻浦之節。宗像田島宮へ勘解由殿参詣有之、右御宮由来書、大宮司所望有之候處、書法不宣候由に付下拙へ被仰付可然段、付廻り分限方山本源助方より福岡へ申出有之、勝次へ認め差出候様にとの事に候處、此節御用懸り横玄蕃殿より船田半太夫殿へ御達有之、御同人より廻浦先相島へ早浦便にて申来候、

宗像大社参詣の際、大宮司に由来書をもとめたが、いい物がないので、青柳に書かせようということになって、付廻りの責任者山本源助から福岡の藩庁に申し出、御用係りから早舟で出張先の相島へ指示が届きました。

且又先年志賀島より金印出候、右聞及有之印紙所望有之、付廻りの面々より申出有之、即印紙被下候、右に付金印之説拙者え物語有之、貴殿存寄候説は無之哉の旨噂に付少々存寄候儀愚意を述べ候處、勘解由江戸表にて兼て見聞有之候書にも同様に相見へ、甚面白に付書記いたし遣し候様被申聞候へども、是迄右之儀書記致儀にも無之全く御尋に付兼ての愚意を申上候と相答候處、

また、先年志賀島から金印が出たことをお聞きになって、押印紙を御希望なので、差し上げました。その際、存じよりのことがないか、とお訊ねなので、私の意見を申し上げたところ、江戸でも同じようなことを聞いているので、大変面白い。書物にして貰えないか、

とお望みでしたが、そういうことをしたことはありません。お訊ねなので、お答えしただけですとお返事しました。

何卒引取の上右之話通を書遣候はば、江戸帰府の上聖堂之諸儒にも写見可申由にて、頻りに噂有之候に付、無據承知仕候段相答申候、就て右福岡へ引取之上奉行衆へ申達候處、草稿出来致候はば御用人衆へ相伺可申に付、差出候様との儀に付、最前被仰付置候宗像宮略記並後漢金印略考二冊相認め指出候處、

あとでもいいから、書いてくれないか。江戸にもどつて聖堂の儒者にも見せたいと、たつてのお望みでしたのでやむを得ず承知いたしました。

福岡へ帰ってから奉行衆に申し上げたところ、草稿ができたら用人に伺うので提出するように、との指示でした。宗像宮略記、後漢金印略考の二冊を差し出しましたところ、

御老中にも御覽被成、宗像略記は宗像大宮司深田遠江守へ写御見被成、金印略考は御儒者竹田簡吉月形七助侍讀兩人へ御掛被成候處、何れも指支之儀無之旨申出有之由に候、勝手次第近々測量方入込之節指出候様にとの儀、御用人立花小左衛門殿仰越候旨、御浦奉行松山利左衛門御達草稿御下げ被成候に付、九月に又々御領内入込の節、下座郡桑原村へ旅宿にて勘解由殿へ直に差出候處、

御家老もご覧になり、宗像略記は宗像大宮司深田遠江守へ写を見させ、金印略考は御儒者二人に見せて差し支えなし、とのお返事をいただいたて、測量方へ差し出してよい、と草稿を下げわたされたので、下座郡桑原村へ出て、旅宿にて勘解由殿へお渡ししました（筆者注 何とも大変なお話である）

殊外喜悅にて、諸国段々経過候へども貴殿程国学に達し候人に逢不申、帰府の上は貴殿格別国学発明有之儀は内々御老中方とも可及御沙汰之旨噂有之、奉恐入候段一通相答申候。

忠敬は満悦斜ならず、自分は諸國を遍歴しているが、未だ貴殿程の國學に通達せる人には逢ひたることなしと礼讃し、帰府の上は御老中にも申し上げるとお話があつたので、恐入り奉り候と申し上げました。

筆者注 忠敬の測量日記には何も書いてないが、資料を入手してベタほめである。老中に申し上げるなどと、すっかり御用風を吹かしているいい御機嫌である。

出張先で御用風を吹かしてはいけないと、厳しく誠められていたが、いまでも車中談と云うのがあるように、旅先では口が軽くなる。忠敬も謹言居士ではなく、普通の人だっただと思う。いかに大仕事をしていて期待されているとはいえ、老中に簡単にものがいえる身分ではない。

ただ、同じ論文中に、白河樂翁（松平定信）の乞いに応じて、貝原益軒の『和歌記聞』、『音楽記聞』を校合し写本を献じたとの記述がある。加増されて切米十三石四人扶持、士分最末端の輕輩であるが、学者としては名を知られていた

右宗像略記後漢金印略考之控一通宛、御祐筆所にも差出候様、御境目受持御右筆頭取上野小八噂に付、控一冊宛致筆寫同人迄差出候、但右二冊草稿は別に宿元へも書残置候事。

提出資料を祐筆所にも差し出すよう指示があつたので、提出し、自分控えものこした。忠敬は大に種信の識見に敬服し、之れより神社佛閣古蹟等の調査に多くの便利が得られることを期待して進んで筑前領以外にも同伴しようとした。

此節御測量に付、諸國之神名帳に出候神社は、不殘絵図に御書載被成候由にて、往還筋より右之神社迄之里数町数其外由来書等委敷調子有之、其外名所古趾古書に出候事蹟調子有之に付、御国内其外隣國之古趾御尋有之候に付、存居候分は夫々相答申候、

今回の測量では諸國の神名帳に出ている神社は残らず絵図に書き込むとのこと、往還筋から神社までの里数、町数、由来書などを詳しく調べている。その他名所、旧跡、古書

の事績なども調査しているからと、領内ばかりでなく、隣国の古社についてもお尋ねがあったので、承知していることを答えました。

右に付追々又々御笠郡原田駅より太宰府、寶満、宇瀬八幡宮邊それより下座、上座より日田領に入込候筈に付、貴殿受持之場所にて有之間敷候得共、出方致具候はば近國の古跡等も猶又相尋たき由、勘解由尊に付

忠敬は著名な社寺や名所・旧跡には必ず立ち寄っており、社寺の場合、門前まで測量して、あと境内と宝物などを拝見している。そして由来書、碑面などを写している。好奇心旺盛で旅の余禄を楽しんでいたと考えられ、青柳の報告のようなことは充分ありうることだ。青柳は博学で、歴史・地理的なことをよく知っていた。再度の入込にも青柳が出るよう指名している。「原田駅から太宰府、宝満、を経て日田領に入る予定である。貴殿の受け持ちでないかもしれないが、出役してくれれば、近國の古跡もお尋ねしたい」とのことであつた。

奉畏候、乍然自己には御請難申上候、おなしくは役人共へ御尊被成下候様有御座度旨申達候處、尤之由にて怡土郡より仲津領御領堺之休息所にて暫時休息有之、付廻り原佐太夫（山家代官）上野小八（御祐筆頭取）山本源助（御境目受持分限方）其外御医師等一同暇

乞申候節、

勘解由殿より勝次（種信のこと）事、又々御領内入込之節、御指出被下候様御役人中へ御取成被下度候、いまた同人へ相尋度旨有之候間、此領内頼入候旨及尊候條、いづれも罷歸り、其旨役人共へ可申達様相答引取有之候、罷歸候上にて御用人衆より勝次儀測量旁又々御領内入込之節は、依頼付廻被仰付候様奉行衆へ御達有之候段被申付候事。

畏まりました。しかし自分には答えられないので、役人共へお話下さるようお断りしたところ、「もつともだ」と忠敬は了解して、中津領境の休憩所で休息の際に、附廻りの山家代官、御右筆頭取、御境目受持分限方、御医師など付き添いの面々がお暇乞いに出たとき、忠敬から「勝次のこと、またまた領内へ入り込みのとき、私から尋ねたいことがあるので、差し出しされるよう」依頼をされる。役人たちは藩庁に報告したので、御用人經由、奉行から種信に通達が出た。

九月 勘解由殿原田入込之由に付、福岡出立原田駅に罷越候、但此節受持の外にて被指出候間、依申出御附人壹人御鍵方へ被相渡候、此節江戸より持廻に相成有之諸国絵図は、正徳元禄等に國々より差上に相成候大絵図にて、甚珍敷図にて公儀の外には無之儀に付、隣国絵図写取候て、後代御境目等の儀にて御入用も可有之候哉、

種信は原田宿に忠敬を出迎える。ここでは、忠敬らが江戸から持ってきた国絵図を貸してもらふことになる。公儀以外には無い図であり、隣国の図を写しておけば、境目の論争のときなど役に立つのでは、ということから隣国の国絵図を写し取る請願が始まる。

他国の国絵図を写させるなど、幕命違反ではないかと思われる大サービスであり、文面からはどちらが言い出したかわからないが、流れからみると、貸してもいいよ、と忠敬側から示唆したのではないか。

最前筑後川界争論之節、筑後絵図公辺に有之候御内之御頼入にて御写取に相成儀も伝承有之候事故内々申入、壹枚にても写取差上度存、御境目受持候儀にて上野山本氏へも及尊候分は一段之事に付、内々申入見條様内弟子尾形謙次郎を以て勘解由殿貞兵衛殿両人へ申入候處、随分拝借致させ可申由にて、肥前国図壹枚（但五島は別紙に相成有之）甘木駅にて借受、付廻りの面々も一所に寄合、写取荒写致罷歸り、

以前、筑後川境界論争のとき、内々お願いして写し取ったこともあるとのことなので、内々でお願いして一枚だけでも写し取って差し上げたいと存じ、責任者の上野、山本氏に断らず、内々で、内弟子尾形謙次郎經由で忠敬、貞兵衛へお願いしたところ、了承されたので、肥前国図壹枚（但五島は除く）を甘木

駅で借受け、付廻りの面々も一所に寄合つて、荒写して持ち帰り

右之旨を以て奉行船田半大夫殿より御用人立花小左衛門殿に被差出候処、御写させ可被成由に竹、御写取相済候て荒絵図の方は勝次へ御下け被下候様被申出候処、其段御申聞通相済候様御同人被仰聞候事、右御絵図大書院にて御家老中御覽被成、御絵師衣笠久之丞へ清書被仰付候事。

奉行の船田半大夫から御用人立花小左衛門殿に差出したところ、御写させることになった。荒写しの方は青柳に御下け下さるようお願いし聞き届けられる。国絵図は大書院にて御家老一同が御覧になり、御絵師衣笠久之丞へ清書をするよう仰せつけられた。

大熊氏は補足して「藩庁は之れを奇特とし、御当用より丁銭七貫文を給せられ、此年十月には当春以来、巡見出役したる平素の精勤を賞し、米三俵を賜ひたり。（自記の中にある正徳元禄などに国々よりとある年次は順位違いで、徳川綱吉將軍が諸国に命じ元禄十五年に成れる元禄図を指したるなるべし）」と記す。文化十年丁亥種信四十八歳のとき、崇敬の測量隊は筑前領を出でて、壱岐、対馬、肥前を測ったのち、三度、博多に戻り来りて、種信と交抄を重ねる。

文化十年 測量方壱岐封馬肥前相仕廻又々御領内肥前神崎郡三ッ瀬通、一手は同郡背振越五ヶ山通入込、博多滞留、夫より内宿通木屋瀬へ出、嘉麻郡通豊前猪膝へ入込候筈に付、然処伊能氏三ッ瀬通入込に付、付廻り原佐太夫三ッ瀬御境目へ出迎候処、青柳勝次致出方候哉之趣尋有之候処、此節は受持無之候に付、出方不致候段相答候処、

文化十年、伊能隊が、壱岐、封馬、肥前を廻り、又々御領内の神崎郡三ッ瀬を通り、一手は同郡背振越五ヶ山を通り、博多を経て木屋瀬へ出て、豊前猪膝へ向かうことになった。忠敬が三ッ瀬通入込の際に、付廻り原佐太夫は御境目へ出迎えたところ、青柳勝次は出役するかと聞かれ、ここは、受持でないので出ませんと答えました。

同人へ限りの用引受有之候に付、御領内付廻り不相成候はば、博多旅宿へ罷出候様取計可成旨噂に付、早速其趣御用人衆へ申出に相成候由に付、博多旅宿へ罷出方候様に両奉行より被相達候條、兩日博多下大賀へ致出方候、

青柳限りへの用事があるので、付廻りができないなら、博多の旅宿へ出るよう取計ってほしいと依頼があり、早速御用人衆へ申出に相成り、博多旅宿へ罷出るよう両奉行より通達があつたので、二日間、博多の宿舎下大賀へ出ました。

大熊氏によると、下大賀家は、名は大賀惣右衛門と称し、今博多下呉服町奥村吉五郎居宅が旧趾だが、博多随一の格式家柄で、上大賀家と合わせて、上下両大賀と称する由。測量日記には宿舎は呉服町とのみで、名前は出てこない。

然処伊能氏より筑後志五冊被借渡、尤も秘書之由に候得共、是非借用致度様申談、久留米よりかり受来候、御隣国之度御境目筋之儀御入方も可有之候て、写置可然旨に付、致借用罷り帰り、早速御用人衆へ差出、御記録所へ写取に御成候事、去年借用の肥前国図差返、又々九州図借用之義申入借渡有之、御記録所にて御画師に被仰付、悉御写取に相成候事、

そうしましたら、伊能氏から筑後志五冊を貸与されました。秘籍だそうですが、是非貸して欲しいといって久留米から借用してきた。御隣国との境目などのことで、写して置いた方がよいのではないかといわれ、借用して帰り早速御用人衆へ差出し、御記録所で写取りに成られました。また、去年借用しました肥前国図を差返し、又々九州図借用を申し入れ、貸していただき、御記録所にて御画師に仰付られ、悉く御写取に成られました。

またまた大サービスである。幕吏としては完全に越権行為だ。青柳にほれ込んだことが分かる。そして、ここで、移された九州図が

どこかに残っていれば大ニュースだろう。

伊能氏より貴様事何卒中国地測量に付廻同道致度候得共、兼て江戸表へは申し出置不申候條、只今に至り何分致方無之候、兼ねて存候儀に候得共出立之節公儀に申出御雇に相成候様致答に候へ共、何分残念不及是非候、

藩領を去るにあたっては「あなたを中国地方の測量にも連れて行きたいが、江戸表で申し出てないので、今からでは致し方がありません。兼ねて（貴殿のことは）分かっていたのですが、出立之節、公儀に申出て御雇にすればよかったのに、大変残念だが止むをえない」とお話があった。

近年公儀にも地理之御穿策委敷、風土記等御撰に可相成哉と存候、若左様成る趣にも候はば、九州筋の儀は貴様に御用被仰付候様内々御老中若年寄衆へ申出様可致候、折角乍此上和書之調子致肝要候様噂候て、此度は博多筋にて引取候、拙者儀当春己来久々痛風相煩、近来快候へとも未だ十分に無之、遠路付添難相成に付旁以断申入れ候事。御同人より壱岐対馬之紳社調子二冊手控之分被相贈候事。

近年公儀でも、地理を詳しく穿策し、風土記等を編修されるのではないかと思われまう。そういうことになりましたら、九州筋のこと

は貴殿に御用を仰付られるよう、内々御老中若年寄衆へ申出るように致しましょう。益々国学に御出精下さいとお話があつて、博多から引き取りました。

私は、当春己来、久しく痛風を煩っており、近頃、快方に向かっていますが、未だ十分でなく、遠路の付添は難しいので、お断りを申し入れておきました。お別れに、伊能様から壱岐・対馬之紳社調二冊の手控之分を贈られました。

忠敬として最高な気の使い方である。他領への付き添いを依頼した例としては浜田藩士土井に、芸州領内の近道を案内せよと命じ、実現しているが、あまり例はない。また、ここでも老若に申し出るといつている。小論のはじめで、車中談と否定したが、ここまでくると、一概に否定はできない気がしてくる。史実には出てこないが、文書で提出すれば、老中、若年寄に達するルートがあつたかも知れない。少なくとも、若年寄には文書で意見をだすことは出来たと思う。

青柳種信の人物について房総資料などにより、間接的に承知していたが、種信自身の記録に接し、興味を持ったので、紹介を試みた。参考になれば幸いである。入力編集委員の高宮勲氏を煩わせた。悪い原文をデータ化していただいた御努力に御礼申し上げます。

【註1】 大熊浅次郎 福岡・博多の郷土史家として知られる大熊浅次郎は、慶応二年一月二十九日、福岡藩士の家に生まれた。明治二十四年から博多商業会議所の書記となり、のち書記長となつて十九年間にわたり博多商業会議所の運営に努めた。明治四十二年に、のちに東邦生命社長となる太田清蔵らと九州中央自動車株式会社を設立してバス、タクシー事業の先駆けとなり、実業界に脚を踏み入れた。

杉山茂丸の片腕として関門トンネル事業の推進に尽くした。当時を知る松永安左衛門は、「杉山の左右大臣には河内卯兵衛と大熊翁が居た」と評した。

のちに、筑紫史談会に拠つて大正三年の創刊以来、実に三十二年の長年月にわたつて郷土史の研究に余生を費やす。昭和二十七年八月二十九日に死去。（関係HPより）

（わたなべ いちろう）

新刊紹介



高木崇世芝

『近世日本の北方図研究』

北海道出版企画センター 2011. 11. 25.
326ページ、定価 [本体9400円＋税]

高木崇世芝さん（会員）の力作が出版されました。江戸初期、慶長四年（一五九九）から明治一〇年（一八七七）までの約二八〇年間にわたつて日本において作成された北方図の変遷についての総合的な探索と研究の成果がまとめられています。作成にかかわる文書や記録が少なく北方図については、図そのものをできるだけ数多く集めて分類し、図形から系統を探り、図に記載される僅かな文章から作成の年代や意図を読み解くことが重要という考え方にたつ著者の、五〇余年にわたるという精力的な全国調査研究の集大成です。当然ながら、伊能忠敬の東蝦夷測量、間宮林蔵と高橋景保にふれる部分があり、「官板実測日本地図」成立事情の詳しい記述は著者ならではのものといえます。（鈴木純子）

富士山の方位に拘った銚子測量の検証

宮内 敏

一、伊能忠敬による銚子地方測量

それは一八〇一年五月十四日（享和元年四月二日）に始まる第二次測量のときであった。江戸湾の西縁より測量を開始し、三浦半島・伊豆半島を東岸から一周し、沼津に出て東海道を通り七月十六日に一旦江戸に戻った。

七月二十九日に再び江戸湾の東縁より測量を開始し、木更津、州崎（館山市）、勝浦、九十九里海岸を経て下永井村（旭市）に至った。上永井村から海岸を離れ、小濱村（ここより銚子市）、三崎村等を通り、八月二十六日、飯沼村東町田中玄蕃（注）の新宅田中吉之丞宅に着いた。吉之丞宅は玄蕃宅と近いが、天体観測のしやすさで吉之丞宅になったと考えられる。（図⑤参照）止宿裏の小高い台地は玄蕃山と呼ばれ、天体観測には絶好の地点である。（図①C、★から、推定できる）

到着の日より、佐原から伊能三郎右衛門（忠敬の長男）、伊能平右衛門、伊能七左衛門、清宮亀太郎、久保木太郎右衛門（清淵）（注）等親類縁者が船で訪れた。寝食を共にし、歓談に花が咲いたに違いない。この時、銚子は忠敬の「ふるさと」と化したのである。長期滞在となった止宿（吉之丞宅）では、ここまでの測量結果の検討がされたに違いない。

い。久保木清淵に武蔵・相模・伊豆・上総・下総・房州の下図作成を依頼している。

（注）田中玄蕃 下総国飯沼村の豪農で、近世干鰯・醤油醸造で巨富を得て士分待遇を受ける。江戸時代から明治にかけての豪商。（注）久保木清淵 十七才若年ながら忠敬の漢学の師、伊能測量の協力者、忠敬没後も大日本沿海輿地全図完成に尽力する。

二、富士山の方位測量に拘る

伊能測量の基本は導線法と交会法である。導線法による累積誤差を交会法と天体観測で補正した。各地から観測できる富士山は補正に役立つ山である。

富士山から二百km弱離れた銚子は富士山を観測できる東端の地で筑波山・久慈山（注）

をも観測できる絶好の位置にある。

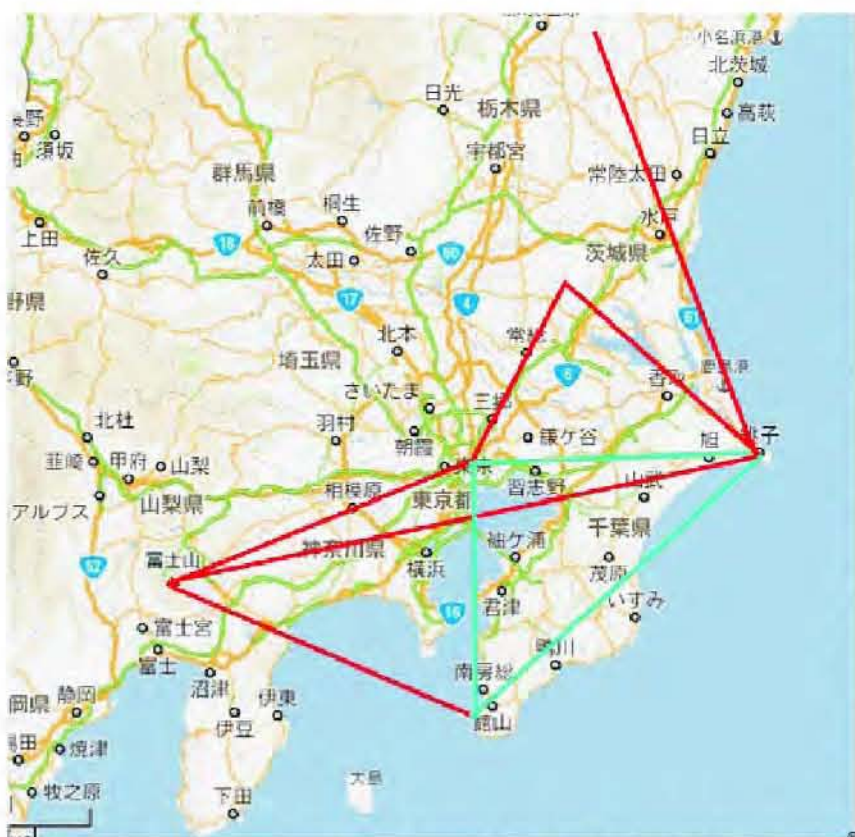
第一次測量は南北方向の移動が主だが、第二次測量では初めの百十余で、江戸を中心として東西百九十km、南北百二十kmの範囲を測量して銚子に着いた。

忠敬は、この地から富士山の方位を測量することで、伊能測量のシステム全体の検証を試みたのではないだろうか。

忠敬は到着の日より富士山の方位を測るべく手分けして待った。洋上に浮かぶ富士山は、快晴でも靄の為見えにくい。朝か夕方が良い。忠敬らは銚子半島を測量しながら方位測量のチャンスを窺った。九日目になって叶ったのである。（一八〇一年九月三日）

測量日誌に「犬若岬に慶助富士山を測る・その悦知るへし」と記している。

忠敬の喜びと結果に対する満足が窺い知れる。方位測量の為、このように長期滞在した例は少ない。忠敬が銚子での富士山の方位測量を如何に重視したかがわかる。伊能図の富士山からは四方八方に四十本ほどの方位線が描かれている。その内の一本は銚子である。（注）久慈山とは八溝山のことか。



富士山・江戸・館山・銚子・筑波山を結ぶ三角形



犬若岬近く、銚子マリーナの夕日と富士山（筆者撮影）

三、伊能図（銚子地方）と

国土地理院地図との比較検証

（一）基準点について（図A、①、⑥参照）

図中のA～H点は伊能図測線上の点で国土地理院地図上に場所を特定できる点である。

屈曲点Aは小濱町西安寺付近、Bは三崎町ミヤズブ付近、いずれも地形的に特定出来る。

C点は止宿の飯沼村東町、田中吉之丞宅

（図⑤参照）D～Iは岬等の突端部である。

A～B間は、ほぼ直線で二つの地図上で方向が合っている。高低差も少なく距離も4km弱ある。図①中で基準とするに最適である。

図①は屈曲点A、Bを基準として、国土地理院地図に伊能図測線を重ね合わせたものである。尚、重ね合わせに際し、測線A～Cの縮尺はC～Iに比して若干大縮尺にしている。（重なり具合を重視した）

（二）九十九里方面から

止宿までの測線について

下永井村（旭市）から10kmほど続く海岸線は屏風ヶ浦と呼ばれる断崖絶壁で陸地部分も浸食により、深く複雑な谷津地を形成している。忠敬らは海岸線より六百から七百メートル内陸を上永井村（旭市）小濱村A点（銚子市）を通り現国道二一六号沿いに、三崎村（B点）、辺田村、ここより国道を離れ現銚子駅舎東寄りを通り、銚子港を経て飯沼村東町の止宿に着いた。

（A～C点まで国土地理院地図に、ほぼ合致）

（三）犬若から開始された

銚子半島の測線について

銚子半島の測量は富士山の方位測量を優先したためか犬若から反時計回りに開始した。測線の繋がりを求めるなら止宿から時計回りの測量が普通である。

図Aの止宿C点や天体観測点★の位置関係が実際より利根川に近くまた、西側によっている。図①A～B点を基準として固定した場合



図A
—: 伊能図測線

合、伊能図の測線（青点線）は東南東方向にかなりズレている。

犬若から開始された測量は前日までの測線と繋がりが無い。犬若（二十七日）を起点



図①伊能図測線及び輪郭と
国土地理院地図の合わせ図

—: 伊能図測線(26日) : 伊能図測線(27,28,31日)
.....: 仮説により補正された測線 : 推定道(黒生=止宿)
.....: 仮説により補正された輪郭

とした別測量と考えれば個別に検証できる。
二十七日と三十一日測量の測線（青点線）を
方角・縮尺は変えず、岬等の突起部を基準と
して西北西方向に平行移動し、国土地理院地
図上に合わせた個別検証の測線（仮説により
補正された測線：赤点線）は国土地理院地図
に合致する。（埋め立て地部分考慮）

測量日誌の三十一日の記録に「今宮村川岸
渡場先ニ至テ止」とある。

しかし、川沿いの測線（青点線）は今宮村
川岸渡場まで届いていない。個別検証の測線
（赤点線）は今宮村（現銚子大橋付近）まで
伸びていて、測量日誌の記録とも一致する。

（四）測線のズレ等の矛盾を解決する仮説

①飯岡方面から小濱A・三崎B・止宿Cまで
の測線はほぼ合致。

②犬若岬からの二十七日と三十一日実施の
測量を個別検証すると、国土地理院地図に
ほぼ合致。（図①赤点線）

A点、B点の基準設定が正しいとすれば、
①、②の結果から、図①測線（青点線）の
ズレは測線接続に問題があった。

仮説

「図②Y点に接続の青点線上の○点は

X点に接続すべきであった」

仮説によれば図①のA―B点を基準とした
場合、銚子半島はX―Y相当分だけ東南東方
向にズレることがわかる。

DとH点の海岸線を基準とした場合は、
図②の測線（二十六日）は赤二重線のように
X―Y相当分だけ西北西方向にズレる。
いずれの場合も銚子半島の形状は保たれ、
ズレは全体の中で補正され吸収されたと推測
できる。

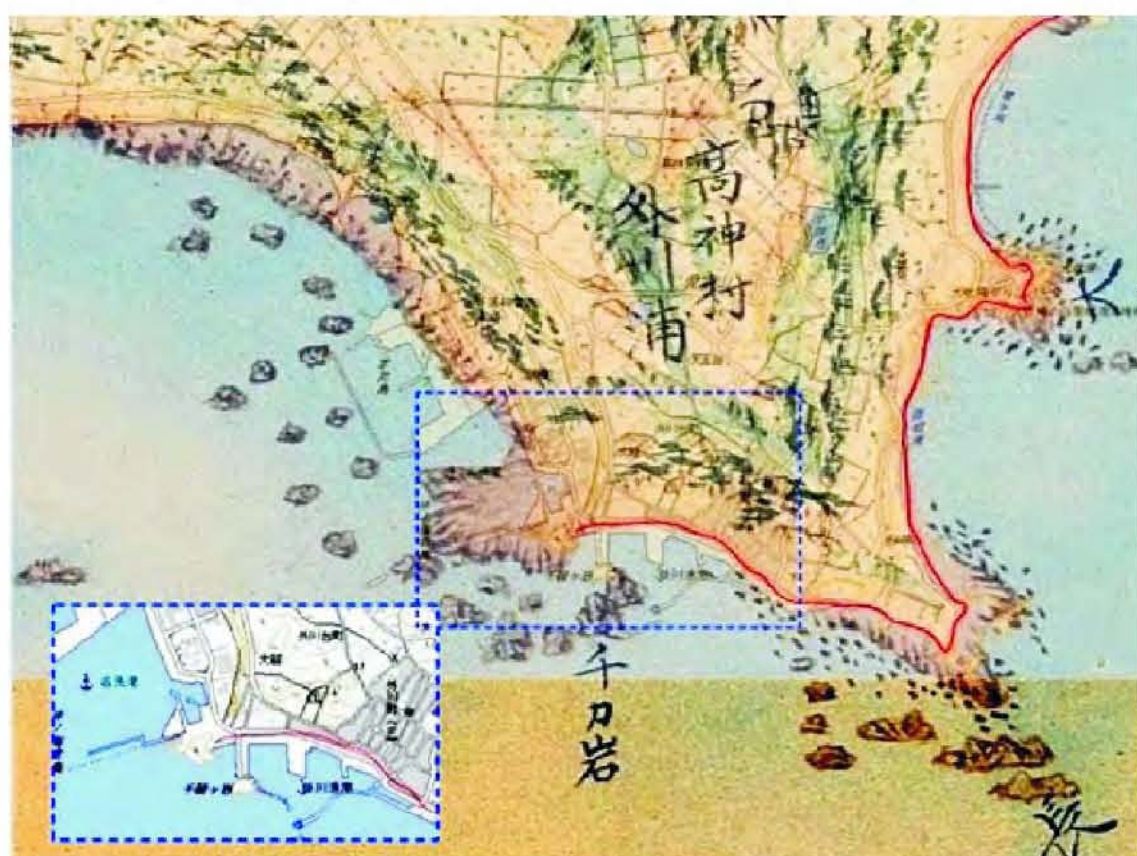


測線接続ミスの要因推測

- ①止宿近くの神社を迂回していると推測さ
れる測線（図②★Y点）は、二十六日
測量の測線の終端（Y点）としてあった。
 - ②Yにつながる緑点線は二十七日、黒生海岸
から帰宿した際、また、翌二十八日宿より
黒生に向かう際、使用した道と推定。
 - ③二十八日黒生から飯貝根・和田を測量して
帰宿した際、また、三十一日今宮方面の測
量に向かう際、測線の繋がりを求めてY点
を通った可能性がある。
- ①、②、③等を考慮すると、この辺りのデー

タが錯綜しており、地元を離れた後の下図作
成で単純ミスにつながったと推測できる。遠
因として測線の繋がりを求めず犬若から測量
したこと、閉ループとなる三崎Bと犬若I間
の測量がなされていないことが挙げられる。





図③ 伊能図と国土地理院地図の合わせ

- (五) 仮説の検証 (仮説は、ほぼ正しい)
 仮説に従い図②青点線上の点○をX点に接続すると
- ① 銚子半島全体で国土地理院地図に輪郭と測線がほぼ合致する。
 - ② 旭飯岡方面からの測線に無理なく繋がる。
 - ③ 止宿や天体観測点★の位置関係が実際と符合する。(図⑤参照)
 - ④ 測量日誌の記録と齟齬がない。

四、富士山の方位測量を簡易検証

ネットに公開されている電子国土ポータルサイトを用いて、地図上に犬若岬の測量地点



犬若台地より千騎ヶ岩を望む

以上の結果から、
 現地調査も踏まえ
 図④+を観測点と
 推定した。

(図③、図④参照) 岬には犬若山と呼ばれる台地があり、台地に登らない限り、観測不可能な死角が生じる。死角を避けると岬から離れた場所となり、測量日誌の記述「・・・犬若岬に・・・」と違和感を生じる結果となる。

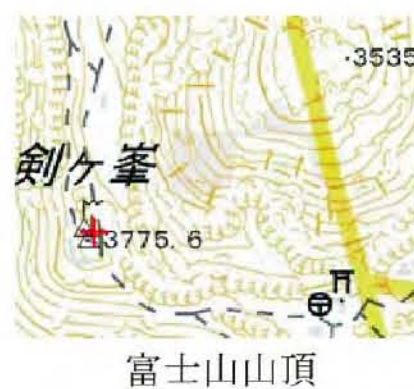


図④ 岬拡大図
 赤：測線、×：推定観測点

と富士山の対象地点を指定し、二点の緯度経度から富士山の方位角を導き、伊能測量隊の値と単純比較を試みた。

(一) 伊能隊の測量地点 (犬若岬) の推定

前述の仮説に基づく補正後の測線を現在の地図に落とすと、伊能図の測線は岬の付け根あたりで止まっており突端まで伸びていない。



銚子から富士山頂付近の形状を正確に確認できないが、計算上、剣ヶ峰を観測地点とした。

(二) 富士山観測点の推測と緯度・経度

(犬若岬)
 推定地点 図+位置
 緯度 三五度四一分五一・七五秒
 経度 一四〇度五〇分四八・三〇秒
 磁北線 六・七度

(富士山頂)

推定地点 剣ヶ峰図+位置
 緯度 三五度二一分三八・五〇秒
 経度 一三八度四三分三八・七五秒

(三) 犬若岬より見た富士山の方位計算
 二点の緯度・経度より方位を計算プログラムで求めた。

計算結果 (犬若岬↓富士山)
 方位角 二五九度三六分三一・五一秒
 測地線長 一九五・八km の値を得た。

(四) 伊能忠敬隊の測量値との単純比較 伊能隊の測量値

- ① 申十九分二十五秒は二五九度二五分相当
(中方位盤使用)
- ② 申十九分 0秒は二五九度 0分相当
(甲方位盤使用)

(注)

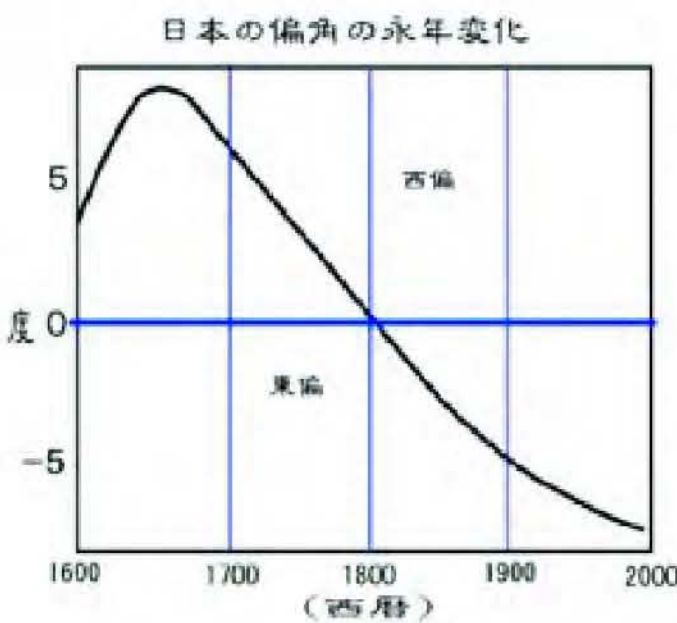
三六〇度を十二支に分割表現するので
一支は三〇度になる。申は子から数えて
八番目。申は三〇×八で二四〇度に相当。
一支(三〇度)を三〇分割して一分と表
現されている。(一分は一度相当)
従って

十九分二十五秒は十九度二五分になる。

- ①の場合、計算値に対する差は十一・五分
- ②の場合、計算値に対する差は三六・五分

測量地点の検証は意味あることだが、銚子・

富士山間は二百km弱離れており、方位線に対し直角方向に五十七メートル移動したとして方位角換算で一分程度である。当時の測量機



1800年あたりで偏角は0度
1800年以降では西偏である。
現在の銚子の偏角は6.7度

器の誤差を考えると、犬若岬内の何処で測量したとしても誤差範囲内である。

伊能測量の時代の偏角は江戸では0に近く方位磁石はほぼ真北を指していたと云われる。結果から、それが正しいことがわかる。

伊能測量の精度を正確に検証するには測量当時のその場所での正確な偏角を知る必要がある。

伊能隊の測量機器の副尺は対角線法と呼ばれるものでバーニア副尺より劣るが、機器誤差は千分の一台と推測できる。伊能隊のデータから偏角を求めるほうが他資料から求めるより、正確で理にかなっている。

忠敬が偏角の認識を持っていたか不明だが、磁石が真北を指さないのは磁石の精度の問題として、精度の高い方位磁石の製作に拘った。

五、犬若岬に測量の碑を！

富士山の方位測量をした犬若岬は、伊能忠敬銚子測量の象徴的場所である。また、犬岩に代表されるこの地は義経伝説の地として知られている。(注)

犬若岬を含む周辺の地域(屏風ヶ浦や犬吠埼)は景勝地であるだけでなく、露出した地形は地質学的に興味深い所である。

現在、JGN(日本ジオパークネットワーク)の登録を目指す「銚子ジオパーク推進協議会」が立ち上がり活動を始めている。これら団体と連携して、此の地に「伊能忠敬測量の碑」を建立することは大いに意味あることである。

銚子の恵まれた自然遺産や文化遺産が児童生徒の学習の場として、生涯学習の場として活用され、それが観光資源ともなり銚子地域の活性化に役立つならば忠敬も大いに喜んでくれるに違いない。

(みやうち さとし)

(注) 義経の愛犬が主君を慕って七日七晩吠え続け八日目の朝、犬岩になった。犬吠なども義経伝説に由来する。



君ヶ浜海岸から犬吠埼を望む
国指定天然記念物の
白亜紀浅海堆積物の地質
犬吠埼灯台：
1874年に点灯。地上高31m。



犬若岬の犬岩
(銚子市HPより)

屏風ヶ浦 ⇒

東洋のドーバーといわれる景勝地屏風ヶ浦は、銚子市名洗町から旭市刑部岬まで続く長さ10km、高さ50mもある断崖絶壁の海岸である。

現在浸食防止のテトラポットが敷き詰められ、その上をコンクリート舗装しているが、波力により破壊されている所も多い。

かつては海底であった砂岩質の岩は浸食を受け、地質むき出しの景観が形成されている。地質学的に興味深い場所である。



↑地球が丸く見える丘展望台



← 一等三角点

← 愛宕山の一等三角点と地球が丸く見える丘展望台

犬若から1km弱離れた愛宕山には明治25年(1892)設置の一等三角点「高神村」がある。北総一の高所で現在地球が丸く見える丘展望台が建っていて、360度のパノラマが楽しめる。ここから屏風ヶ浦や犬若、長崎鼻の岬を眼下に富士山、筑波山をも目視できる。

忠敬の時代、この高台がどのような状況にあったか不明だが、ここに登った形跡はない。

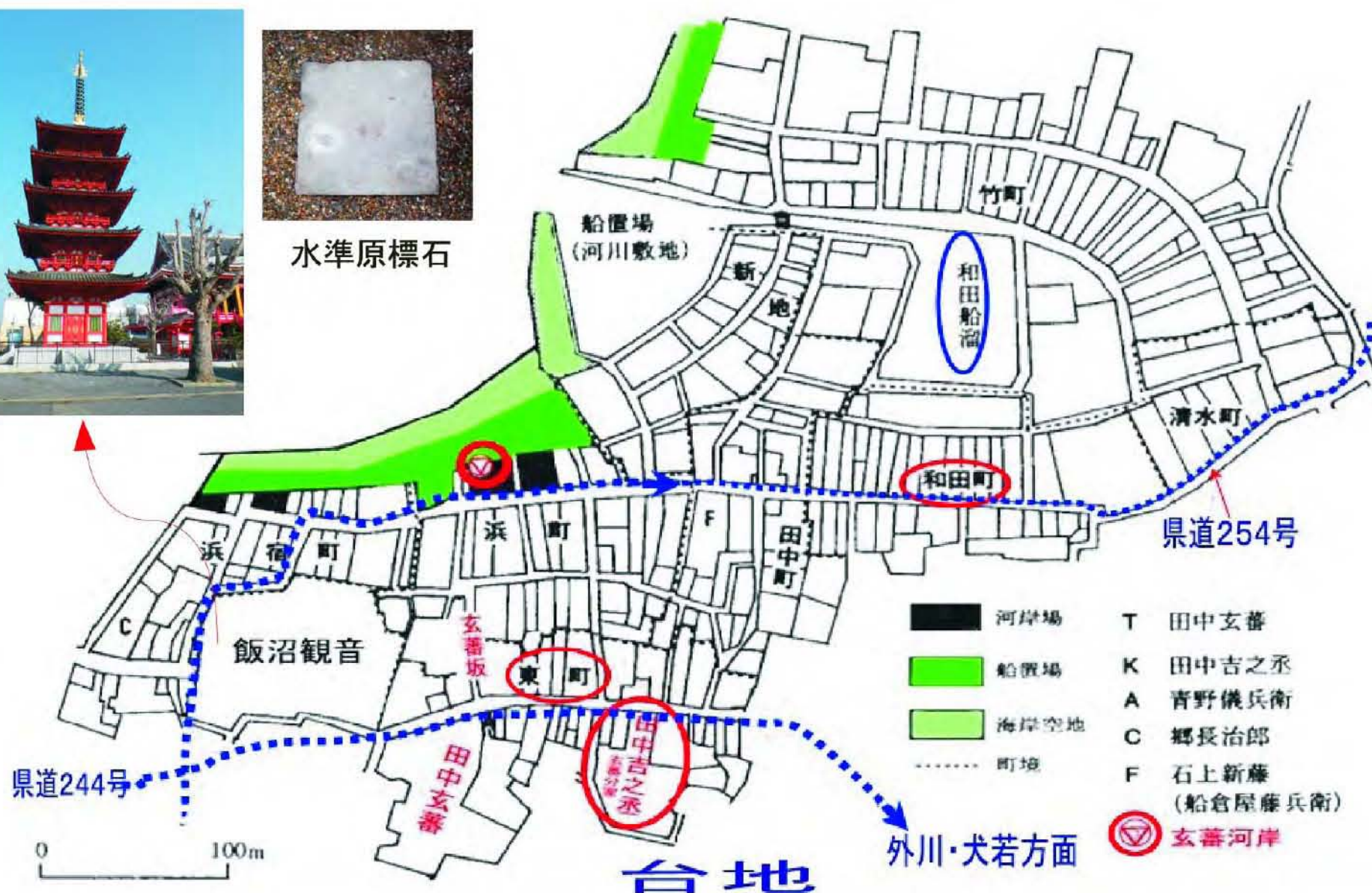


土地争いに関する裁許状の絵図面に加筆 寛文五年八月(一六六五年)
表面は「下総国海上郡三崎村今宮村辺田村野地相論の事・」とある
絵図面には屏風ヶ浦の台地：深く浸食された谷津地が描かれている。
三崎村から名洗村、高神村を経て犬若方面への道がある。(筆者所蔵)

五重塔脇に水準原標石がある。明治五年（一八七二）オランダ人リンドにより設置。これを基準に「日本水位尺」が定められ、各地の高低深淺が測られた。



水準原標石



図⑤ 筑波大学地理調査報告8号P36に加筆（明治20年頃の飯沼村）
都市計画で道路は大きく変わっているが、点線は現在の県道と推定できる。
佐原からの客は玄蕃河岸◎から玄蕃坂を登り止宿に。

小濱村



忠敬らは屏風ヶ浦の断崖絶壁を避け旧千葉-銚子街道を歩いた。
現在国道126号の完成によりA-Bは直線道路で繋がっていない。
この図より屈曲点A、Bをはっきり確認できる。

図⑥ 明治17年 迅速測図：小濱村に加筆

各地のニュース



鳥取県琴浦町

「伊能大図中国地方フロア展」開催

去る九月一六日から一八日の三日間、鳥取県東伯郡琴浦町・まなびタウンとうはくのも目的ホールにて「伊能大図中国地方フロア展」が琴浦町図書館・琴ノ浦まちおこしの会の共催で開催された。国土地理院制作の伊能大図の中国地方の大図と枚測量器具レプリカ、測量日記を基にした鳥取県での行程表、江戸時代末期の地元の古地図などが展示された。琴浦町は、第五次測量で美保関より隠岐に向かう時に渡海に失敗し急遽入港した赤碕の地である。第五次測量では日本海沿岸を、第八次測量では大山から琴浦町を通り倉吉へ向けて測量をしている。

フロア展には多くの近隣市町村の人々が訪れ、床面に展開された伊能図の上を歩きながら見ると



伊能図を見る小学生



測量器具を観察する小学生



伊能図を前にした講演会

動の一環として琴浦町立浦安小学校の六年生児童四十三名が訪れ、琴ノ浦まちおこしの会・高塚良平氏の説明を聞き伊能図や測量器具に興味深く観察しメモをとっていた。二日目には「伊能忠敬の測った琴浦町」と題し、島根地理学会会員の面谷明俊により、伊能図・測量日記・山島方位記・古地図などから琴浦町での伊能忠敬の足跡をたどり、測量ルート・天測の場所・止宿場所の詳細な解説が行われた。琴浦町での山島方位記の記録には、大山の高さを計測した角度もあり、その角度から計算された大山の高さも紹介された。山島方位記の解析結果からは測量地点が特定され、参加者からは「昔の街道筋がいまいな部分もあったが、伊能測量当時の街道筋がはつきりし、今後の町歩きに取り入れたい」との声が聞かれた。

今回の講演のための調査結果をもとに、琴ノ浦まちおこしの会では「伊能忠敬の測跡をたどる町歩き」の会を計画している。琴浦町では伊能測量隊のことを記録した史料は未だ見つかっていないが、これを機会に史料の発見が期待される。

(文責 面谷明俊)

静岡市で講演会 講師・菱山剛秀会員



講師は菱山会員

静岡市内で伊能忠敬の講演会が開かれました。これは静岡にあるワイズメンズクラブが主催したもので、九月二五日(日)駅前「静岡音楽館AOI」で開かれました。講師は東京からお招きした菱山剛秀氏(元国土地理院職員・伊能忠敬研究会会

員)。テーマは「伊能忠敬の測量術」でした。伊能忠敬の話は、測量日記を使い、エピソードを中心に話すのが一般的です。しかし、今回の講師菱山さんは国土地理院で長年地図作りに携わった経験から、伊能忠敬の測量技術そのものを中心にお話されました。内容は三部からなりました。はじめに日本の測量の歴史とその方法。次に伊能忠敬の測量法。最後は伊能忠敬が使った測量法をオリエンテーリングなどで使うシルバークラスを使い、誰もが簡単に自分で測量をできる方法を紹介してくれました。

この体験は多くの方が本などを読んだ知識に加えて、測量の実体験を通して伊能忠敬に対する



講演会場でのスナップ

理解を深めることができたと思います。

当日の参加者は三十名ほどでした。菱山氏のわかりやすい説明、受講者も参加してのコンパスの使い方などを通し、うなずきあい、笑いあいがらの和やかな雰囲気の講演会でした。

受講者の何人かにお話を伺いましたが、大変わかりやすく、面白かったという言葉をいただきました。

(静岡市 加藤 忠三)

新聞から



『北海道新聞』二〇一一年九月二十九日

「伊能忠敬の足跡

標柱の再評価を

「蝦夷地測量は福島から」

見出しにはさらに、「中塚さん講演で強調」と補足されています。講師の中塚徹朗さんは今年九月に本研究会に入会されました。建設会社経営のかたわら、福島町史研究会会員。記事は九月二十六日に町の青函トンネル記念館で開かれた、町教委主催の歴史講座についての報道です。

テーマは福島町吉岡からスタートした蝦夷地測量についてで、伊能大図と現代図の重ね合わせや、手製の(?)の測量道具(象限儀)を用いて進められた。蝦夷地測量が吉岡町から始まったことは地元ではあまり知られておらず、中塚さんは「吉岡漁港にはボロボロに傷んだ蝦夷地測量の標柱があるが、新しいものに立て替えたい」と、再評価をよびかけたという。

吉報を心待ちに声援を送りたい。

『神戸新聞』二〇一一年一〇月三〇日

伊能忠敬測量隊支援の記録

たつのの旧家で発見

(WEB上の記事の要旨)

伊能忠敬が測量隊を率いて播磨を訪れた際、案内役を務めた村の庄屋らの記録がたつの市の旧家で発見された。「御測量方奥組澤場筋御通行付諸事控」で、江戸時代の庄屋山村家の山村明寛さん(83)宅の古文書のなかからみつけた。「奥組澤場筋」とはたつの市北部の街道筋、一六八ページにわたり、受け入れ態勢、経費などと詳述しており、地元で用意したとみられる鳥瞰図34枚が巻末に付いている。文化十年の記載があり、第八次測量時のもの。忠敬の足跡を調べている、神戸市の歴史研究グループ「ふるさとひょうご創生塾」のメンバーらが解説中である。

伊能忠敬記念館酒井一輔学芸員の談話、

「伊能忠敬関連の古文書は各地にあるが、鳥瞰図は珍しい…」

(WEBには鳥瞰図を示す解説者の写真あり)

『読売新聞』千葉版 八月二十九日

伊能忠敬をNHK大河ドラマに

八月二十八日に香取市で発足した「伊能忠敬NHK大河ドラマ化を目指す推進協議会香取準備会」についての報道です。

準備会は香取市民を中心に約30人の会員で発足、年内に三万人を目標とする署名を集め、来年一〜二月ごろNHKに要望書とともに提出することを計画しています。会長は木内志郎さん、当研究会会員です。



会員便り

矢能 彰(さいたま市)

二月の香取市での国宝指定記念会には体調を崩して残念ながら欠席。地震で旧宅や小野川周辺の被害をニュースで知り、驚きです。先日、千葉県伊能忠敬記念公園を再訪。

平岡 佳子(綾部市)

佐原の祝賀会楽しいでしたが、小野川沿岸が被災したのは残念です。



新入会員自己紹介



高宮啓明さん
(千葉県東金市)

先般 渡辺先生、戸村茂昭様のお骨折に依り家系を明らかにしていただきました。高宮九代目啓明です。

我家は忠敬の長女

去る二月二十日香取市にて開催された、伊能忠敬関係資料国宝指定祝賀会の席上、イノペディアの編集幹事をされている戸村茂昭さん初め、渡辺名誉代表のお力添えで、伊能忠敬の子孫として高宮一族を紹介して頂きました。之を機に研究会に入会しました。また五月二十八日、千葉工業大学で開催された伊能図フロア展を一族多勢で見学した際、渡辺先生から懇切丁寧に説明して頂き、一同感銘を受けました。伊能忠敬の偉業はごく表面的にしか理解できていないので、これを機にもっと深く勉強したいと思っております。



高宮 勲さん
(千葉県東金市)

私は伊能忠敬の生誕の地、九十九里町から車で二〇分程の距離に位置する東金市に住んでおります。製造業に長年勤務した後趣味の域を

チョット越えた面積で、野菜と果樹を栽培しております。私の自信作は沢山有りますが、野菜では蒔蘿草と胡、果樹では柿と無花果です。皆さんから大変重宝がられております。

高宮 宏さん (千葉県東金市)

稲女の孫(忠敬の曾孫)秀女が五代目藤右衛門広成に先室として嫁し一女雅を残して他界、その跡目に既に先夫を亡くしていた折枝女がお守り役として嫁す、その九代目当主です。
年齢も七十八歳を通り越し現在に至る迄人生を懸けて頑張ってきた植木(天目松、紅アセビ、五葉松)の生産販売をしております。
忠敬の血筋を心に秘めて残された人生を全うしたいと念じております。
娘共に忠敬の名前を頂き、長女敬子、二女由子、三女折栄とし、孫五人おります。

私は自己紹介の代わりに、佐原での伊能研究会で戸村茂昭先生が忠敬とその曾孫高宮辰治郎の肖像が似ているとのお話を受け、五月二十八日の忠敬稲女を偲ぶ会で、辰治郎の足跡を発表せよとの指示を受け、蚕糸業年譜を作成配布しました。その要点を紹介します。

「高宮辰治郎蚕糸業の足跡」

慶応 元年 養蚕に着手す

明治 四年 蚕種を製造し希望者に配布す

明治一〇年 桑の購入販売を開始す

明治一六年 絹織物模範工場設立し工女養成す

明治二二年 東金製糸場を伝習所に無償貸与す

明治二三年 盛蚕社社長、高山社と共同伝習す

明治二五年 山武郡蚕糸組合委員長に当選す

明治二六年 同仲社特約で生糸を米国へ輸出す

明治二八年 百人操機械製糸業を経営す

明治三三年 全国実業大会千葉県代表となる



大西道一さん
(兵庫県神戸市)

プロフィール
◇一九三三年四月十五日、兵庫県高砂市で生まれる。現在神戸市に在住。

先日、以前同じ高校の教員でした宮内先生の伊能忠敬の講演を聞き、すぐに伊能忠敬研究会に入りました。
伊能忠敬については、地理の受験に使える程度くらいの知識しかありません。よろしく願致します。

趣味は、音楽鑑賞(最近はおペラ等映像付きの音楽鑑賞が多いです)、映画鑑賞、ラーメンを中心とした食べ歩き(自称B級グルメ)、数年前に病気をしてから少し控えています。旅行です。

最近、素晴らしい銚子の地層を日本ジオパークに登録すべく、千葉科学大学の先生と一緒に頑張っています。



工藤忠男さん
(千葉県銚子市)

私は昭和十九年十月生まれの現在六十六歳、独身です。以前は高校で地理の教師をしていましたが、現在退職後、銚子市議会議員をやっ

明治三五年 内国勸業博覧会審査委員となる
県沿革史には「名聞を好まず、功を他に譲り、一生を蚕糸業に捧げた篤行者」とあります。

◇一九五七年、神戸大学工学部機械工学科卒業。

◇一九五七～一九九三、三井物産に勤務。プラントの設計、工場建設、医療器の開発等に従事。

◇神戸大学、関西大学、大阪電気通信大学、大阪芸術大学、京都国際大学、京都建築専門学校等の講師兼任。現在はフリー。

◇一九九九年大阪電気通信大学工学博士、東亜天文学会理事・評議員、日本スペースガード協会・理事・関西支部長。

◇高校三年の文化祭で国産初のプラネタリウム製作（一九五一年）。一分刻みの日時計製作、世界初（一九八九年）。

◇伊能忠敬の参考図「高砂・加古川」の研究。

◇厳密なパノラマつなぎ写真の完成。世界初（一九八九年）。

◇関勉氏発見の小惑星に(GOG)Onishiと命名され、天空を巡行中。

◇趣味：天文学、写真、音楽・絵画鑑賞、エジプト学、古代ローマ技術史の研究、アーチェリ、アクアラング、スキー、ヨット、考古学、近代帆船の研究。



山岡剛秀さん
(東京都)

私は平成十九年四月に仕事の関係で九州の福岡に赴任しました。赴任先の執務室には、実際の大きさを福岡の伊能大図の複製が懸けられており、それを毎日眺める生活が始まりました。

それからしばらくして、伊能忠敬研究会九州支部の石川清一さんから、支部の例会で伊能図についてお話させていただきました。お話する題材を探すため、江戸東京博物館で開催された伊能図展の目録を捲っていて、大図九十号の江戸の図に見覚えのある付箋が貼られているのに気が着きました。念のため、国土地理院の担当から中図と小図の付箋の拡大図と大図九十号の画像データを送ってもらい比較したところ、それぞれの図に付けられている説明書の記載方法が同じであり、筆跡が酷似していることを確認しました。

国土地理院が陸地測量部から引き継ぎ保有していた伊能図に貼られていた図の説明と遠く太平洋を隔てた米国議会図書館に保管されていた伊能図に貼られていた伊能図の説明の記載方法と筆跡が一致することから、これらの伊能図の出自が同じであることを確信し、その年の九州支部の例会で紹介させていただきました。また、翌二十年の例会では明治初期に伊能図がどのように利用されたかということについてお話させていただきました。

そして、平成二十一年三月末に九州を離れ東京に戻ることにした時、九州支部の石川さんと伊能忠敬研究会に加入させていただくことを約束してお別れしました。

これまでにお会いした伊能忠敬研究会の皆さんは、非常に熱心に、また専門的に伊能忠敬について調査されており、浅学の私は皆さんに遠く及びませんが、今後、会員のひとりとしてご指導いただきますよう宜しくお願い致します。



堀野正勝さん
(完全復元伊能図
全国巡回フロア展
事務局長)

早いもので、
「完全復元伊能図
全国巡回フロア展」
がスタート(第一回
深川展、二〇〇九年四月)して、足かけ三年になります。この度の東日本大震災の影響を受け、開催見合わせが出るなど厳しい状況はありますが、催行目標四〇回を目指し頑張っています。会員の皆様には、催行希望会場の掘り起こしなどのご支援を引き続きよろしくお願い申し上げます。

「伊能忠敬さん」との係りは、国土地理院に在職していたということもあり、比較的古くから興味を持っていましたが、あくまでも本業の延長線上ということではありませんでした。その中で思い出は、国土地理院の資料館(今の「地図と測量の科学館」の前身)に展示しようと、古い地図類を地図倉庫で探すうちに、伊能中図や伊能大図(江戸南北)などに触れたことでしょうか？保存状態が悪いので、何とか表具をし直そうと働きかけたことを思い出します。その後予算措置・補修され、現在も収蔵庫にキチッと保管されていることに安んじています。

本格的な関わりは、伊能ウオークでしょう。皆さんご存知なので詳しくは触れませんが、伊能ウオークは、歩く先達「伊能忠敬さん」を顕彰し、「平成の伊能忠敬ニッポンを歩こう」をテーマに、一九九九年一月～二〇〇一年一月の二年間にわたって開かれたものです。伊能忠敬研究会、(社)日本ウオーキング協会、朝日新聞社などが主催し、一

筆書きによる日本一周約一万キロ」を歩くイベントでした。また、イベントの終了し二〇〇一年一〇月には、深川八幡宮境内に立派な「伊能忠敬翁」の銅像が建立されました。この頃は、現職の一国土地理院職員（二〇〇二年六月退職）でしたが、これらのイベントに係ることができたことも思い出に残っています。

現在は、伊能図フロア展事務局長のほか、本業としての（財）日本測量調査技術協会参与、国際航業（株）調査役の傍ら、（社）日本ウオーキング協会常務理事、茨城県ウオーキング協会会長等も務めています。何れも大先達「伊能忠敬さん」に縁ある仕事をさせていただいておりますので、「大先輩・忠敬さん」の名を汚さぬよう引き続き、楽しく活動していきたいと思っています。

会員の皆さまには、今後ともよろしくご指導くださるようお願いし、入会のご挨拶といたします。



高安克己さん
(千葉県松戸市)

二年ほど前に三〇年あまり過ごした山陰松江から、郷里の千葉県に戻ってきました。そしてすぐに本会に入会させていただきました。

千葉県人として郷土の偉人である伊能忠敬さんに少し近づくことができたような気がしております。

松江では地元の大学の研究所で中海や宍道湖などの汽水湖の環境について研究していました。最後の六年ほどは法人化した大学の役員として研究からは遠ざかっていました。

そんなある日、有志数名が「伊能大図フロア展」

を松江で開きたいのだが、と相談にやって来られました。元々地質学が専門だったので地図をみる機会も多く、また大学でも科学技術の研究促進や普及が担当でしたし、何よりも私自身千葉県出身ということもあつたので、この企画には諸手をあげて賛成しました。

伊能測量隊が山陰に来たのはほぼ二〇〇年前、当時としては最新の機器と先端的な技術を目の当たりにしたこの地方の人々は、それをどのように受け止め、何を学んだか、といったことも興味があり、地元の資料を少し調べ始めていたところでした。調べていくうちに、山陰地方には、開発の波に取り残されたこともあつてか、伊能が日記に記録した寺社や名所や街道がほぼそのままの光景で残っていたり、旧家にはかなり多くの伊能隊関係の史資料が残されているらしいこともわかってきて、まだまだ面白いテーマはいくらでもある、と感じていました。

松江での「フロア展」は、堀野様はじめ中央事務局の方々のご指導の元で連日大盛況でしたが、何よりもこのときに渡辺一郎様におめにかかり、実に新鮮に多くのことを伺ったことが、帰郷後、真っ先に伊能研究会に入るきっかけとなりました。

私自身はまだ山陰での仕事をいくつか引きずっており、当分の間、両地を往復する生活が続きますが、伊能の足跡をたどりつつ、伊能さんに関心のある仲間を増やして、いずれは山陰支部をつくりたいと考えております。個人テーマとしても、しばらくは土地勘のある山陰を中心に、伊能測量隊と地元の人々との関わりなどを調べていきたい

と思っています。先輩諸氏のご指導をよろしくお願いいたします

研究会では早速本誌『伊能忠敬研究』の編集を仰せつかり、経験豊富な方々に手ほどきを受けながら少しずつ仕事に慣れてきたところです。ちょうどカラー化・電子編集化に移行するところですので、これまで蓄積してきたノウハウも生かしつつ、新しい試みにもどんどんトライしていきたいと思っております。会員のみなさまには、本誌を身近で存在感のある会誌にするために、忌憚のないご意見とご教示をお願いするとともに、研究成果や関連するニュースの積極的な投稿も、あわせてお願いする次第です。

中塚徹朗さん（北海道松前郡福島町）

北海道福島町で町史研の事務局をやっています。この度、忠敬研究の発表をするにあたり戸村先生にご指導いただきました。えぞ第一次測量スタートの地にあつて、勉強の機会を頂戴したく入会しました。（編集部注、中塚さんの福島町における講演は別記『北海道新聞』報道のとおりです）

金子和蔵さん（相模原市）

囲碁や写真などを趣味としております。生涯学習のための組織が座間市にあり、「あすなろ大学」と呼び、研修や仲間との交流を進めております。たまたま公開自主講座で発表することとなり、「人間・伊能忠敬」というテーマを掲げて、調べをすすめております。入会動機はそんなところです。（編集部注、金子さんは右の発表前の会場に

各地を巡って ホットニュース

渡辺一郎

渡辺です。最近私が係わった
ニュースを報告します。

●私は担当でなかったのですが、八女には出かけませんでした。お隣の佐賀は、旧佐賀藩士佐野常民が明治十五年に元老院議長、日本赤十字社社長として、東京地学協会でおこなった講演が、伊能忠敬顕彰活動の第一歩でした。

だから、佐賀の会員で、佐賀銀行行員の馬場さんをお願いして、色々仕掛けをしました。「フロア展御視察のお願い」というメモを書き、鹿島市長に持っていったいただきました。馬場さんは、さすがに勤め上げた銀行マンです。市長に面接しお願いしていただきました。担当者が見学に来て、近隣と合同して開催することを検討しているようです。

一方、別の話で、鹿島市と香取市は昔から密接な関係があるそうで、伊能測量二〇〇年を記念するイベントとして、香取市長が招聘され、鹿島市長、香取市長、佐賀県知事の鼎談会が、十一月五日におこなわれました。（香取市の一部に旧佐賀鹿島藩の飛び地があったそうです）

これに先立って一〇月五日に、香取市の大河ドラマ推進協議会として、準備会を九月二八日に発足し、署名運動を始めた旨、香取市

長に報告し、横芝、九十九里、東金に正式な話しかけを要請する会合がありました。その席で市長から鹿島市訪問の話を聞いて、県知事や鹿島市長にお願いしていただくよう依頼しました。

馬場さんは、この線と併行してキチント動いていただきました。佐賀でフロア展を開催できる可能性が高まったと考えています。

大河準備会では、十一月七日に、香取市観光課長も同行して、横芝、九十九里、東金の首長さんを訪問し、活動について協力を確認したそうです。東金市長訪問には高宮勲さん御夫妻も同行されました。

●広島のプロア展：大学側の熱心な広報活動で約三五〇〇名は入ったと思います。中高校生九五〇人は大きな数でした。大河実現の署名も四〇〇名くらい集まりました。香取市では署名が五・六千名になったと聞いています。目標三



渡辺一郎名譽代表と小村和年呉市長の記念撮影
（中央の地図は、謹呈した広島附近の伊能中図）



国際学院大学関係者多数の応援により展開が終わったところ

万です。木内信次会員が頑張っています。
三日の準備では事務局メンバーはお骨折りでしたが、私は広島TVの依頼で、入船山記念館にゆき浦島測量之図の前で絵図の解説の録画をおこないました。終わって、ほぼ展開



完全復元伊能図フロア展in広島会場
広島国際学院大学

が終わった会場に戻って、伊能図の上でインタビューを撮りました。
夜は、NTTの旧夫妻に食事を御馳走になりました。そのなかで山口大学にフロア展の仕掛けをしているという有難い話をききました。改めて訪問し提案する積りです。

四日にはオープニングセレモニー終了後、地元の忠敬ファン・井垣さんの紹介で、呉市長に挨拶に伺い、呉市におけるフロア展の開



広島国際学院大学鶴理事長（左）と野村事務部長（右）、中央は筆者

催、大河ドラマ推進についての連携などをお願いをしました。フロア展については、市制施行一〇年記念事業の一環として、来年開催の方針を決めていただき、当日の午後担当者が会場を視察され、経費などの打ち合わせをおこないました。帰宅後八日に、フロア展堀野事務局長のところに、平成二四年一月一九日から二一日開催の予定



会場で写した山口県萩の伊能図

と、至急経費見積を提出するよう連絡がありましたので、実現は確実でしょう。大変うまくいって、案内してくれた人達がビックリしております。色々なことがありますね。

大河連携については、市長さんに、まず本が要るよ、と言われました。福島への配慮で、1年遅れましたが、平清盛の撮影が十二回まで終わったということでした。脚本も積んで見せていただきました。NHKへの便宜提供などについても御意見を伺いました。実際に係わった自治体ですし、フロア展で係わりができますから、色々参考意見が聞けるでしょう。推進協議会の方にもお話ししました。今度香取市長にあったとき、情報提供しようと思っております。呉市長に広島周辺の中図を謹呈してから、打ち合わせを始めたのですが、終わって、記念撮影をして別れました。

録画は四日夜放映され、8分間だったそうです。よくまとまっていた、との評判でした。

五日夜は、地元の忠敬ファンとの懇親会を持っていたきました。フロア展開催をキツカケにどんな展示をしようか。浦島測量之図は呉市民も見た人は少ないのだ。「所有者の宮尾さんと話をつけ、ケースを借りて、市の職員が立ち会えば実物展示も可能だ」などという話に花がさきました。この機会に何人か研究会に入っていただけそうです。

六日。大学の理事長さんは、毎日会場に出ていらつしやいましたが、お話しているうちに、岡山でもやりたいのですが、と意見を伺ったところ、それは加計学園の理事長さんに相談するのがいい、と推薦されました。多分乗っていただけるのでは、というお話でした。

とたんに、先日、高安さん、宮内さん、新会員の工藤銚子市議と銚子市長に、犬若岬建碑のお願いにいったとき、岡山なら加計学園だといわれ、同系統の千葉科学大学の学長さんに挨拶してゆけと言われて、お邪魔したことを想い出しました。

そういうことなら訪問しようときめ、堀野事務局長と二人で理事長に紹介をお願いしました。

●大谷亮吉旧蔵伊能中図競売の記者会見：特

報に書きましたとおりです。伊能洋さん、鈴木さん出席。伊能洋さんに写真を撮り直していただきました。

なお、競売開始の記事は十一月十一日付けの毎日新聞（総合版）と朝日新聞（東京版）に掲載されました。



記者発表の様子

【例会報告】

九月十一日（日）午後二時～四時、パークコート神宮前一階会議室において、二〇一一年度第一回例会を開きました。参加者は一六名でした。

テーマは「伊能測量を受け入れた地元記録の読み方」、報告者は渡辺一郎名誉代表。

三重県尾鷲市中央公民館所蔵の尾鷲組大庄屋記録（「紙本墨書尾鷲大庄屋文書」）に含まれる「公儀御役人衆上下拾四人此度測量為御用諸国通行被成候二付右取扱扣」を例として、測量作業の実際の姿や、地域における対応の細部を知る史料としての地方文書の意義、各地に残るそれらの史料の検討、発掘の必要性にふれたのち、活字化された史料に沿って記録や用語の意味などの解説が行われました。

この文書の解説は本誌前号から伊藤栄子・渡辺一郎共著で連載されています。

なお、尾鷲の大庄屋土井家の文書は尾鷲組大庄屋管内一四ヶ村の宝永五（一七〇八）年から明治初年まで、二八代の大庄屋が引き継いできた、ほぼ全分野の完全に保存された史料です。



例会で渡辺氏の報告に熱心に聞き入る会員たち

『測量日記』DVD刊行

前号でお知らせしたとおり、『伊能忠敬測量日記 原文』DVD版が刊行されました。

『伊能忠敬測量日記』清書本全一八冊の原文が一枚に収録されています。発行は「伊能忠敬と伊能図の大事典イノペディアを作る会」です。購入申し込み好調とのことです。購入と合わせて研究会に加入されるかたも出ています。

千葉日報など共同配信各社、毎日新聞（東京夕刊）朝日新聞などで報道されました。

できました！

研究会の入会案内パンフレット

同封のパンフレットを新しく作ってみました。会員募集などに活用したいと考えています。全国巡回フロア展の会場にも置き好評です。追加ご希望のかたは部数をお知らせ下さい。お送りします。（お急ぎの場合は事務所ではなく、Eメール、または鈴木自宅あてFAX・042・479・7979・7980か電話・042・479・7979に連絡下さい。事務所は留守が多いので）

なお、フロア展会場には会員募集のポスターも掲示しています。

会報掲載記事の著作権について

理事会

伊能忠敬研究会（以下本会という）は、一九九六年三月の創刊以来、会報を刊行してまいりました。渡辺一郎氏の「伊能図探究」を引き継ぎ、七号から六三号まで一五年の長きにわたり、会報を刊行してきましたことは、ひとえに会員各位のご支援、ご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

これまで会報『伊能忠敬研究』は主に会員向けに配布してまいりましたが、より広く社会に発信し、後世への伝承・公開を確実・容易にする手段として、既刊分も含む全号を電子データ化して公開することにいたしました。準備作業および提供については本会とタイアップする「伊能忠敬と伊能図の大事典・イノペディアをつくる会」の協力によります。

本会は任意団体でもあり、会報掲載記事の著作権の帰属について明確に規定してまいりませんでした。電子データ化にあたり、あらためて確認が必要であると考えます。

そこで、掲載記事の著者から、その著作権の許諾又は譲渡を本会にいただきましたようお願いする次第です。具体的には、創刊号以降の会誌に掲載されたすべての記事に関し、それらの著者に対して、著作権の一部（学術目的のため、あるいは非営利事業のために、著作物の一部または全部を複製し、公衆発信する権利、および、前記の権利を第三者に行使させる権利）を本会へ譲渡していただくようお願いいたします。

願います。

電子データ化の対象となるのは、伊能図探究 第一号から第六号までと、伊能忠敬研究 第七号から第六三号までの、すべての記事です。

また、今後発行する会報の記事の著作権は、すべて本会に属するものとさせていただきます。投稿、あるいは掲載にあたってはあらかじめご承知いただくようお願いいたします。

本来であれば、会員ならびに著者の皆様お一人ずつに「著作権の許諾手続き」を行うべきでございますが、本会公告を以って著作権の譲渡をお願い申し上げる次第です。

もし、この件に関しまして、ご了承ください。ただけない場合、あるいはご不審の点がある場合は、**二〇一二年一月末日までに**、本会・鈴木事務局長あてに、文書または電子メールでお申し出下さい。お申し出のない場合にはご了承いただいたものとして、進めさせていただきますので、よろしく願います。

著作権等が本会の帰属となった場合でも、著者名義による出版、記事掲載などが必要となった場合は、ご連絡いただければ、ただちに許諾しますので、よろしく願います。

編集部注 近年、学術雑誌の電子化が進み、多くの学会において同様の対応が行われています。このお願いはそれらを参考として理事会が作成しました。ご理解、ご協力をお願い致します。

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

- ① 会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年四回発行
- ② 例会・見学会の開催
- ③ 忠敬関連イベントの主催または共催
- ④ その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地

〒153-0042

東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F

伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール inohken@ae.aunone-net.jp

郵便振替口座 00150-60718610

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○「伊能研究会」公式ホームページ

<http://inoh-tadtaka.org/>（休止中）

○「Inopedia（イノペディア）」

伊能忠敬と伊能図の大事典

<http://www.inopedia.jp/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakano/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料

<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

◇本研究会の会誌『伊能忠敬研究』は六二号よりカラー印刷になり、編集も完全電子化へ移行しました。

皆様からの原稿をコンピュータで本研究会編集部が自前で編集・レイアウトした完璧な電子ファイルを印刷会社へ送り、印刷会社では印刷製本のみを行います。いわゆるデスクトップ・パブリッシング(DTP)というシステムで、経費節減と今後の電子出版化への対応を考慮したものです。

すでに編集部ではこの方法で「国宝指定・十五周年記念特集号」(A4判)以降、この六三号まで試行錯誤しながら編集作業を進めてきました。その過程で編集のノウハウもようやくつかめてきました。カラー化と電子化のメリットを生かし、効率よく編集作業を進めるためには、投稿される皆様にもこのシステムに対応した原稿を作成していただく必要があります。

そこで、編集部が希望する投稿原稿の形を次のようにまとめてみました。まだ暫定的なものですが、とりあえずこの投稿要領に沿って原稿を作成していただき、今後、経験を重ねる中で改善していきたいと思っておりますのでご協力ください。なお、次号(六四号)から現在のB5判よりも一回り大きなA4判になる予定です。投稿要領はそれに対応するものとなっております。(編集部)

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり六頁まで、各地のニュース・お知らせなどは一件につき刷り上がり一頁以内とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約2400字(600字×四段)です。長い原稿の場合は連載として分割してください。

②原稿のかたち

・本文(テキスト)

原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

*電子ファイルの作成環境にない場合は手書き原稿でも受け付けます。不明な点は下記編集部までご相談ください。

・写真

一般的なJPEGまたはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットした電子画像ファイルとし、印刷サイズは350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1mm前後のJPEGファイルになります。通常のデジタルカメラによって3mm以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。わからない場合はL判(127mm×89mm)程度にプリントアウトしたもので結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイルにしてください。カラー数の少ない図はEPS形式のフォーマットでもかまいません。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその挿入位置とおよそのサイズを編集者がわかる形で本文中に記入しておいてください。

送り先

・電子メール添付の場合 inohken_kaiishi@koalanet.ne.jp
・郵送の場合 〒153-0042

東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておいてください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

編集後記

◇前号に引き続き、試行錯誤しながらカラー版の編集に取り組んでいます。本号から巻頭に「伊能図の旅」と題したグラビアを載せています。今後ともさまざまなテーマでカラー版のメリットを生かせるよう企画していきたいと思っております。また、本号では新入会員の紹介など、会員の動向や活動の状況などを紹介するイエローページを充実させました。そのためページ数が増えて、予算の関係から紙を少しばかり薄くしました。本誌を受け取ったときの印象など、ご意見をお聞かせください。次号からサイズも一まわり大きなA4判になります。迫力ある写真や伊能図を掲載していきたいと思っております。記事の投稿など、引き続きよろしくお願い申し上げます。(T)